

成形圖說

農事部
九十

內閣文庫		
三二六五	和	類
三二六五	書	類
一五	冊	號
三六	函	架

內閣文庫		
三二六五	和	類
三二六五	書	類
一五	冊	號
三六	函	架

史一七五

內閣文庫	
番號	和 31165
冊數	15 (5)
函號	196 100



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



成形圖說卷之九

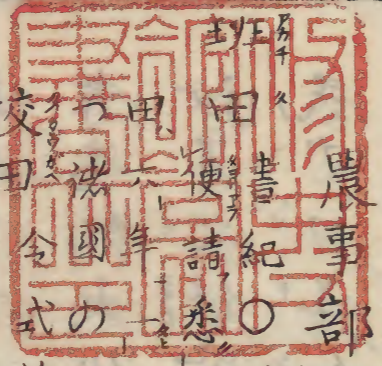


役丁 黃冊 均田 目錄

附度竿



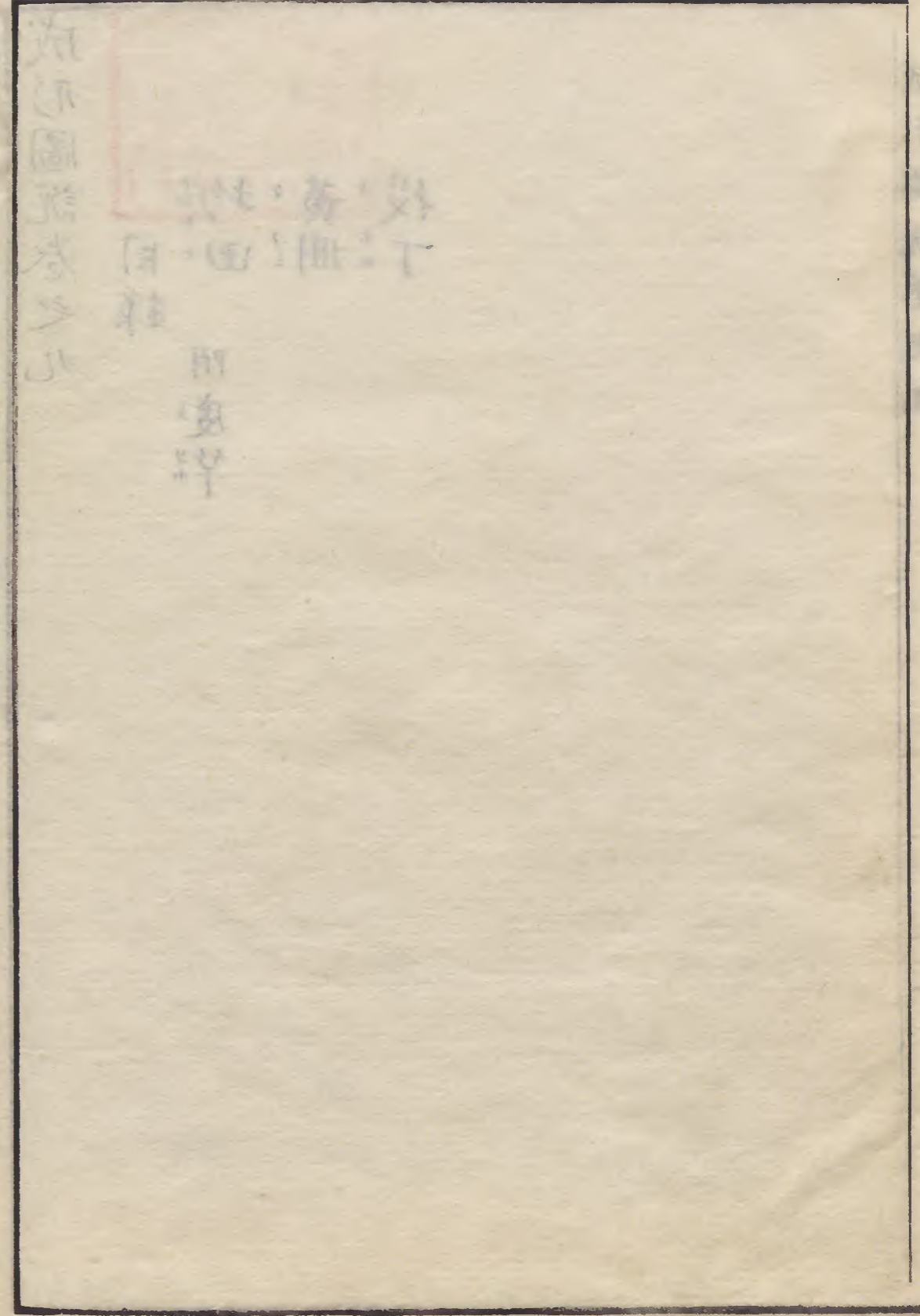
成形圖說卷之九



農事類聚 田部類田
 續紀天 元平 元年三月 班口分田 依令 收授於事 不
 收更班令 義解班 頒也 所以 殖五穀 之地也 凡
 班萬葉集 到班 班使 之事 此使 考之 一年 一度 づ
 校田 改ら び 校ハ 勘なり 勘出 田 地 六 國
 史に 歴舉 後 玉 勘定 とい 亦 此 出 地 六 國
 給田 史 以上 同 上 又 日 收 數 田 均 給 於 民 ○ 持 統 紀 田 也
 孝 德 紀 田 班 田 皆 多 比 多 延 喜 式 謂 授 田 也
 田 割 孝 漢 意 倣 寺 萬 葉 集 檢 察 壘 田 地 事 ○ 大 隅 國 量 置 田 紀
 部 田 部 官 勘 入 勘 事 毛 檢 地 東 支 配 地 武 二 年 記 田
 地 官 勘 入 勘 事 毛 檢 地 東 支 配 地 武 二 年 記 田
 視 入 勘 事 毛 檢 地 東 支 配 地 武 二 年 記 田
 姓 入 勘 事 毛 檢 地 東 支 配 地 武 二 年 記 田
 謂 班 配 田 收 授 の ば 古 子 竿 入 地 押 地 取

成形圖說卷之九

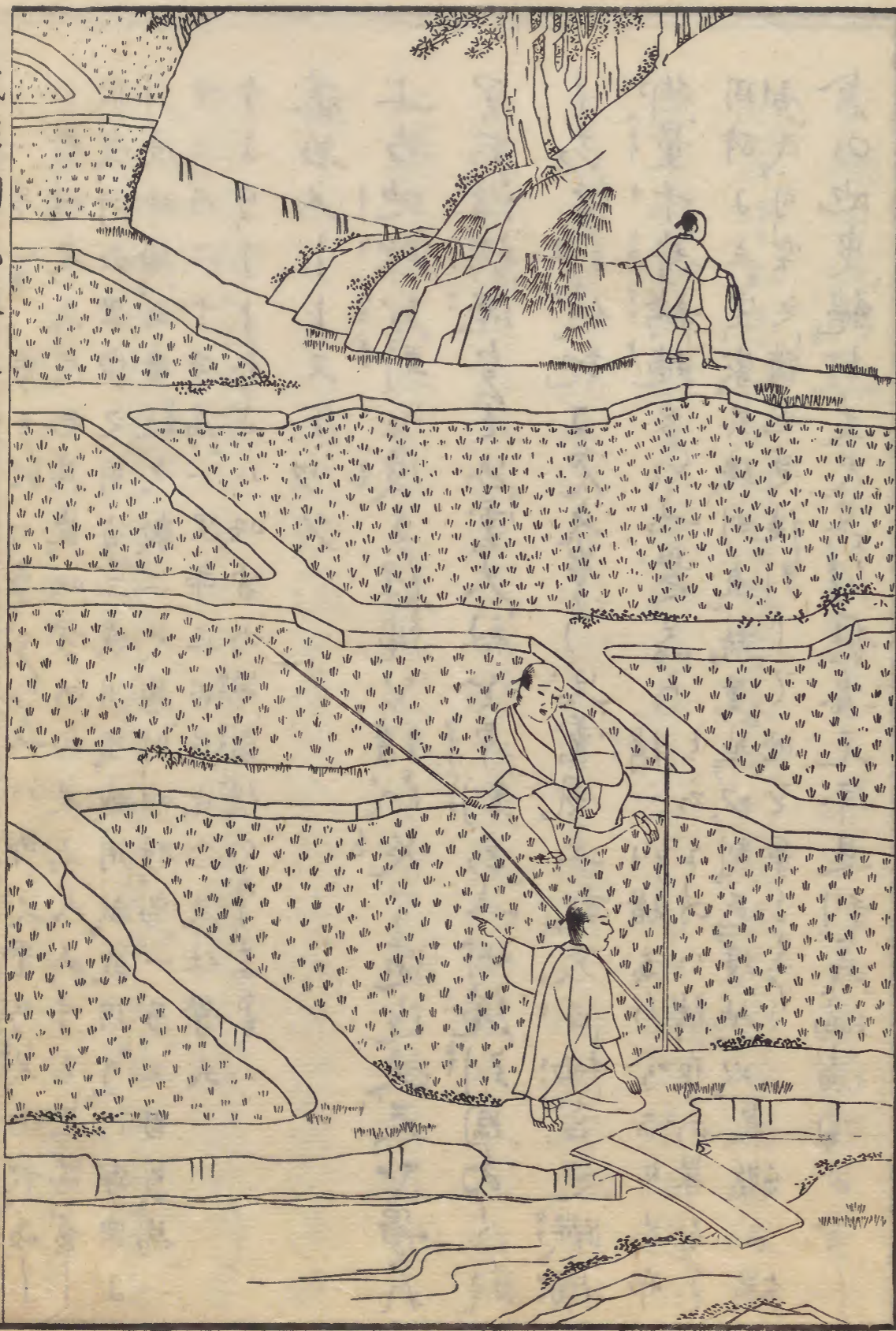
二



均田 五代史周世宗嘗夜讀書見唐元稹均田圖歎曰此致
 天下之方田 通典宋熙寧五年重修方田法○文獻通考宋
 括田 廣治平畧○玉海開元九年以字分田孟子分
 量田 大學衍義補今世量田用 丈量 清丈 以上政刑大
 踏勘 丈 量 歸田錄以丈尺
 丈量 歸田錄以丈尺
 打量 量地曰打量
 藩名 Pフメーテイ ینگ ハン デラ ン デレイ ン
 孝德紀大化元年新詔曰凡國家所有公民大小所領人衆
 汝等之任皆作戶籍及校田畝校田畝謂檢覈墾田頃畝及
 民戶口年紀白雉三年至是班田既訖乃及是法國
 檢地の始ありとも是より前 履中の御宇檢校天子之

百姓 八公田と私を支配して檢地せしむ也田
 令曰凡校田先課役後不課役先無後少先貧後富建武記
 曰就田數可支配事遠國三十町中國二十町近國十町別
 一人分面に可參勤當知行之地不足之輩者可沙汰渡課
 役於惣領若無惣領者可辨其郡催促之役人
 丈 古事記○凡上古地と度及長短と量る寸丈と字
 之亦之の用と凡ちこ法まりの六尺一尺くふなと
 卷ハ間竿より引て下をわしてうの尺 田竿即量竿
 檢竿 打竿 尺丈

度竿 通 丈篙 篙尺量 以上郷 歩弓 大學衍義補按子
 唐山の畝率ハ自
 成形圖說卷之九 三



方一弓と一歩より一弓より一歩即ち量弓の長一
て魯般尺六尺也其長此方の曲尺五尺五寸と云
數度衍云里歩之用有三或用里或用畝或用弓の字典に
引度地論云量地之數二尺為肘四肘為一弓三百弓為一
里三百六十歩為一里而三百弓也○又仕學大
來より弓と歩は此方の竿取役の事なり

蕃名メートストツ

上古地理分野と度は繩と結んで延て遠近丈尺と量れ
る所謂考繩多量と出雲大社と草創より時繩引用の
一と神代紀より云きり出雲風土記天日廬宮之蹤横
御量千尋考繩といふ是より考ハ山楮あり分る大布
周詩に立室家其繩則直疏量地以制邑度地以
居民司空之職也受繩引いて地と量るより東鑑に鎌
倉の地曳繩打丈尺其後應安元年足利義滿諸國に令一

て檢田沙汰ヤリ六と阿里工代ハ六の田割より一
町三十六百坪の積より豐太岡の町五六の田割を改て
三千坪と一町とし當時此五六の町長六十間横ハ
中の道より左右一十間づつ中は通路十間の割法にて
五十間よりあり五六三十の積を退私録にハ太岡の時
に繩ハ六尺五寸也其後六尺繩よりあり是ハ福葉濃州の
致されしと云漢史服誦曰豊臣氏後女弊俗其害と述さ
れハ武家の友位と云のみに言るなり又宮室と飾り
て以のみに莊嚴よりあり其より天下の田と丈量
るも古法と變じて三百歩と一町と古法に三百六十

歩を以て一町とすはひと歩を以て一夫一日の食と
して一町一年の食分を充と云ふはさうさかく約らして
いふ一乃王法と変られ一は万民争り窮さうんさ
れば法は再びおふ復んこと井田一とび變して復一難
がごとくちとぐ一蓋を氏丈量とせしむるまじりの
とく或一郡一邑一莊と眞人あけ六十餘畝の地は是
が法をとおしかくハ計らむるまやとあり蓋氏曰天
正のあの水帳は一段三百歩とあり是は左周より始るま
ればとつり又民間ありハ或六尺二寸ま至三寸四寸
有崎等の差たり或曰文禄より歩法六尺三寸一歩ハ

是畦と除く宛りまあり或六尺五寸まハ畦越かて宛じ
是近來のまあり田と人あまらるる見ま田の畦ハ家の
あ居のぶと一丈餘の歩法六尺三寸方ハ畧二帖の定尺
也是と家の間ハ積ま六尺三寸ハ柱の中間毎ハあるま
柱横六畝の家ハ六寸角八畝の家ハ八寸角あり家のま
ま四角方のま柱の幅ハ畧五尺一
寸五分縦六尺三寸尺の畧を敷て廣くは使れりは合
る風なり然らば小き畦とありておあは六尺五寸裕を
くお大まある畦と加ておあハまは好まあるをさあま
あると又檢竿のま六尺五寸ま何れ六尺三寸まあるま

て尺もバ是^{アセ}睦と除て完しる^ハ法^ハさる^ハべし
古事記傳曰凡家の柱と柱との律原發揮
 の中^ハ中^ハ間と云ハ記の所謂ハ箇^ハ間^ハあり
曰以曲尺六尺五寸為一步俗稱一間算路用之又以六尺三寸為一步俗稱京間每間置席二間置閘一其閘四寸折半之配一間則得二寸以減六尺五寸餘六尺三寸為席一間之法算田積用之又以六尺為一步俗稱一間今按是後俗の從より瓊牙拾遺曰紫宸殿清涼殿ハ七尺間也凡伸中指以十為間臣下之屋作凡伸中指以九為間故以六尺三寸為疊間是古の制といつり
 ○凡竿^ハはてあ^ハさ^ハき^ハ解^ハ交^ハは^ハ繩^ハ引^ハて^ハ地^ハと^ハ量^ハは^ハと^ハ向^ハ繩^ハ又^ハ水^ハ繩^ハ管^ハ
 繩^ハ等^ハの^ハ名^ハ何^ハも^ハ其^ハ繩^ハ約^ハ長^ハ一^ハ町^ハ或^ハ百^ハ間^ハみ^ハして^ハ一^ハ間^ハの^ハ示^ハ子
ナヒサケ 絢^ハ坐^ハ十^ハ間^ハの^ハ所^ハは^ハ色^ハ籜^ハの^ハ記^ハ跡^ハと^ハほ^ハく^ハふ^ハなる^ハ但^ハ繩^ハと^ハら
 畝^ハ段^ハ展^ハび^ハて^ハ縮^ハす^ハゆ^ハ之^ハ竿^ハと^ハふ^ハさ^ハる^ハ竿^ハと^ハお^ハ竿^ハは^ハう^ハり^ハよ
 て^ハを^ハ展^ハび^ハて^ハ用^ハく^ハ置^ハ竿^ハと^ハ用^ハく^ハ皆^ハ撥^ハ通^ハより^ハあ^ハる^ハふ^ハこ^ハなる^ハなり

凡^ツ丈^ツ竿^ツを^ツ二^ツ間^ツみ^ツして^ツ一^ツ丈^ツ二^ツ尺^ツ之^ツと^ツ一^ツ間^ツみ^ツ一分^ツづ^ツの
 飯^ツ計^ツと^ツい^ツふ^ツ百^ツ丈^ツの^ツ丈^ツとい^ツつ^ツと^ツ寸^ツ歩^ツと^ツ終^ツら^ツば^ツ次^ツに^ツお
量と^ツう^ツる^ツを^ツ教^ツ百^ツ姓^ツと^ツ竿^ツ取^ツの^ツ巧^ツ拙^ツと^ツ靴^ツ履^ツ何^ツふ^ツと^ツな
洗ぐ^ツを^ツぬ^ツす^ツを^ツ私^ツふ^ツく^ツ細^ツ査^ツと^ツう^ツる^ツを^ツ俗^ツの^ツ物^ツの^ツ類
 語^ツや^ツ越^ツ等^ツ違^ツと^ツら^ツふ^ツハ^ツ田^ツ地^ツの^ツ省^ツ敷^ツと^ツ相^ツ違^ツや^ツあ^ツら^ツう
 い^ツつ^ツり^ツ○^ツ竿^ツと^ツ打^ツす^ツ尺^ツ寸^ツと^ツ去^ツて^ツ某^ツ間^ツと^ツむ^ツら^ツり^ツを^ツ登^ツる^ツハ
 十^ツ間^ツ五^ツ尺^ツ五^ツ寸^ツと^ツお^ツら^ツう^ツ付^ツハ^ツ十^ツ間^ツと^ツ定^ツて^ツを^ツ零^ツの^ツ二^ツ尺^ツ
 五^ツ寸^ツハ^ツ去^ツる^ツと^ツな^ツる^ツ又^ツ十^ツ間^ツと^ツ登^ツる^ツと^ツ横^ツと^ツ二^ツ尺^ツ五^ツ寸^ツづ^ツ五
 尺^ツを^ツ零^ツと^ツら^ツう^ツハ^ツ一^ツ方^ツハ^ツ十^ツ間^ツと^ツな^ツる^ツて^ツお^ツれ^ツ凡^ツ六
 計^ツる^ツ二^ツ寸^ツ尺^ツまで^ツ細^ツに^ツ究^ツむ^ツて^ツハ^ツ反^ツて^ツ穴^ツ費^ツと^ツ解^ツて^ツ煩^ツと
しき^ツ伊^ツ急^ツ孝^ツ德^ツ紀^ツも^ツ半^ツと^ツ五^ツ寸^ツと^ツ訓^ツさ^ツる^ツ五^ツ寸^ツと^ツな^ツれ^ツハ

半とありては、計りて、半丈ハ有、姓ハ、計、何、ら、志、じ、べ、竿、城、
 大き、より、帳、計、と、い、ふ、と、と、略、零、と、云、が、ご、と、一、
 折、ハ、八、唐、檢、地、地、押、字、の、分、何、里、深、ある、あ、と、ハ、各、國、有、司、
 の、存、と、る、不、なる、○主、税、式、上、田、中、田、下、田、下、田、の、差、
 等、と、載、ら、し、と、と、同、地、の、肥、瘠、と、就、て、冬、定、り、な、り、馬、
 貢、上、中、下、の、名、と、土、宜、と、由、て、貢、賦、と、と、一、と、志、
 高、田、五、倍、下、田、十、令、曰、凡、度、地、量、銀、銅、穀、者、皆、用、大、尺、大、
 倍、多、と、い、と、あり、令、曰、凡、度、地、量、銀、銅、穀、者、皆、用、大、尺、大、
 度量、の、所、は、度、地、ハ、町、間、積、り、て、測、量、規、矩、の、法、と、い、ふ、東、
 鑑、曰、大、輔、房、源、性、源、進、士、左、衛、無、雙、算、術、者、也、加、之、見、田、頭、
 里、坪、於、眼、精、之、所、單、不、違、段、步、町、段、と、知、る、ハ、各、算、法、の、上、
 小、ち、る、と、と、なる、
或、ふ、と、心、持、り、て、平、安、川、と、て、大、河、あり、そ、
 と、攻、め、り、る、と、い、ふ、

瀨、と、諸、家、乃、者、其、町、見、と、い、尺、つ、り、一、に、其、川、幅、七、八、
 町、或、十、二、三、町、何、る、金、一、と、ま、ち、く、ま、て、定、め、る、一、と、也、
 の、家、長、吉、田、長、利、同、二、男、彦、成、と、命、一、に、川、の、濶、何、程、う、あ、
 る、お、違、ふ、さ、や、と、い、ふ、が、量、と、命、と、り、は、あ、人、が、
 組、と、相、違、ふ、と、い、ふ、十、町、餘、の、川、表、の、う、多、れ、バ、相、違、あ、さ、や、
 う、に、積、ら、ん、と、い、ふ、と、是、来、多、く、お、組、の、者、各、連、川、の、ち、と、
 里、又、折、除、て、じ、う、と、尺、後、也、は、物、録、人、三、人、川、端、と、出、て、
 折、見、ら、る、解、と、り、彦、成、と、命、一、に、朝鮮、之、の、ハ、長、高、一、と、い、
 つ、と、と、系、組、乃、小、柳、檢、七、郎、ハ、大、男、彦、成、と、命、一、に、
 考、ま、し、ま、と、い、ふ、尺、檢、七、郎、ハ、大、男、彦、成、と、命、一、に、
 尺、ゆ、り、ま、と、い、ふ、この、土、名、を、東、乃、方、一、の、川、向、乃、人、丈、程、と、
 せ、ま、丈、敵、と、い、ふ、一、檢、と、尺、ゆ、り、ま、と、い、ふ、尺、檢、七、郎、ハ、
 持、物、と、あ、る、と、い、ふ、則、そ、こ、に、立、る、は、と、敵、川、は、と、立、さ、と、
 ざ、は、ゆ、り、ま、と、い、ふ、尺、檢、七、郎、ハ、大、男、彦、成、と、命、一、に、
 敵、と、い、ふ、と、い、ふ、尺、ゆ、り、ま、と、い、ふ、尺、檢、七、郎、ハ、
 と、い、ふ、乃、その、皆、乃、間、敷、と、あ、尺、り、系、に、八、町、五、段、微、飯、と、
 と、い、ふ、乃、其、也、
 ○昔、八、田、地、の、方、限、と、四、至、と、一、て、宅、じ、四、
 と、は、式、と、山城、國、地、二、町、在、葛、野、郡、十、三、條、水、谷、下、里、四、至

東限岑山口 南限堀越山谷 永為殖供御地黃地又元亨
 西限岑 北限辛河合
 二年四月廿日田粟津國小田村十條四里八坪の四至東限
 他領限西道限 北他領限南濱 といふがごとき是れども田地
 四方限を究めてハ後所居宅まで差缺をさすまはすぬ
 るを今のごとく畝段打ふまゝといふるに裁判至
 要曰弘仁二年二月三日格田地占請之輩偏限四至不論
 町段是以檢四至則涉于官舍人宅勘町段則不滿四至之
 内求之政途理不合然自今以後占請地一定町段不依四
 至云々

田^々文^々東鑑○拾芥鈔田籍部あり康曆元年式目日吉祇
 園北野神輿可造畢仰使節召出國大田文段別三拾
 文可檢納之○新田宮藏弘安八年薩摩國田文事神社佛
 閣園街莊園等注分地頭御家人發明領主之交名可申之
 御圖帳是本民部省圖帳の畧言たり故に御の字と附
 名寄帳 高辻帳 檢地帳 亦云野 圖田帳
 黃冊 續文獻通考明太祖洪武十四年詔定編賦役黃冊之
 造其田地開豁各戸若于有官民田地二則係官田者照依
 官田則例起科係民田者照依民田則例徵收俱黃冊有載
 賦額適均而力役 魚鱗冊 同上明太祖既定天下乃集糧
 亦稽此以平矣 魚鱗冊 長暨耆民躬復田畝以量度之
 遂圖其田之方圓大小次書其主名 魚鱗圖冊 昭代典則
 及田之四至編彙為冊號曰魚鱗冊 魚鱗圖冊 洪武廿年
 浙江等府縣集里甲耆民躬履田畝以量度之圖其田之方
 圓次其字號悉書主名及田之丈尺四至編類為冊其法甚
 備以圖所繪狀若魚鱗然故號魚鱗圖冊 清丈冊 丈冊 以上未
 鱗然故號魚鱗圖冊 清丈冊 丈冊 信編 九 占基簿 文獻

成形圖說卷之九

九

靈臺儀象志
測量圖

續抄集

宅序

一とらちよ

人とも

身とも

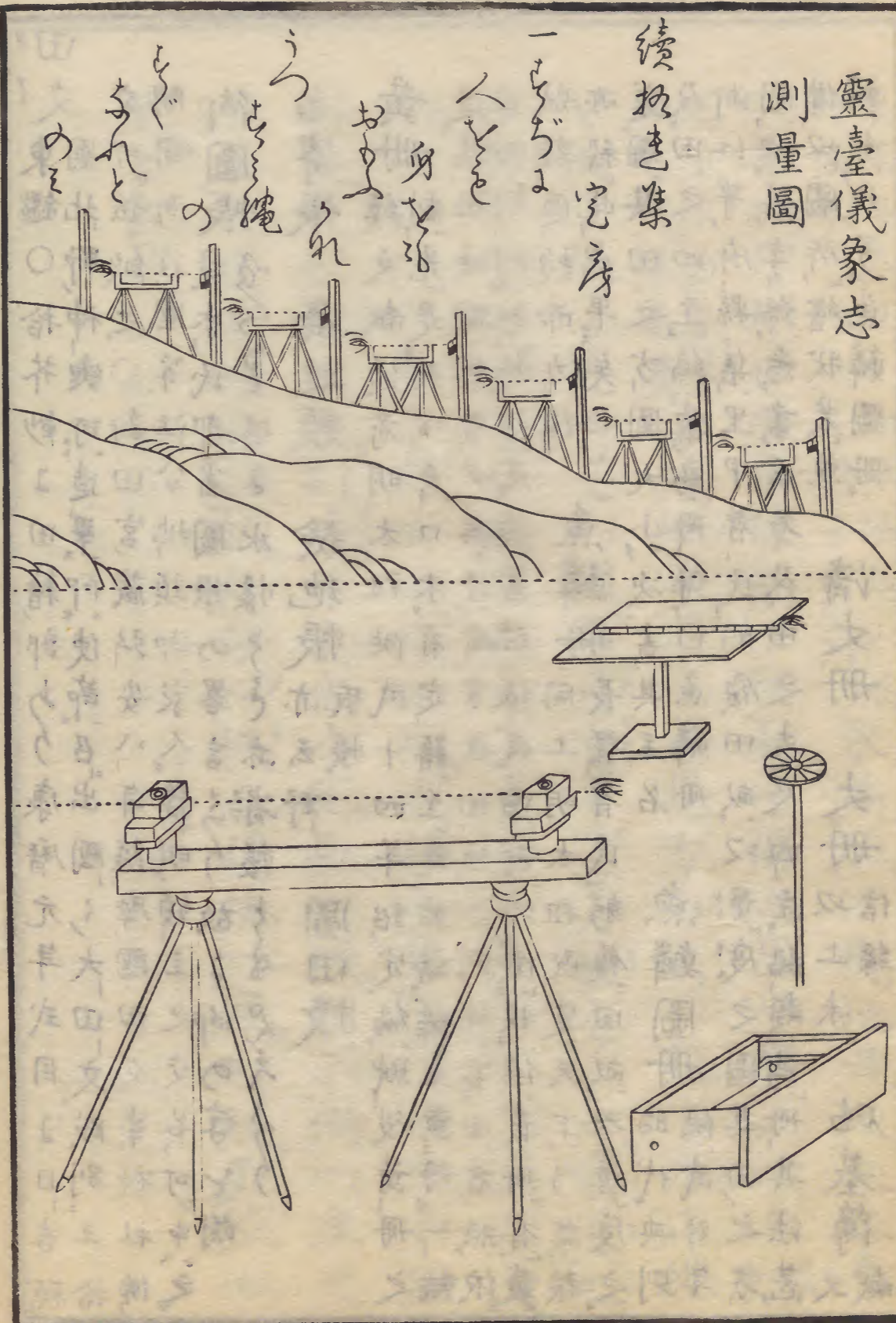
おま

うら

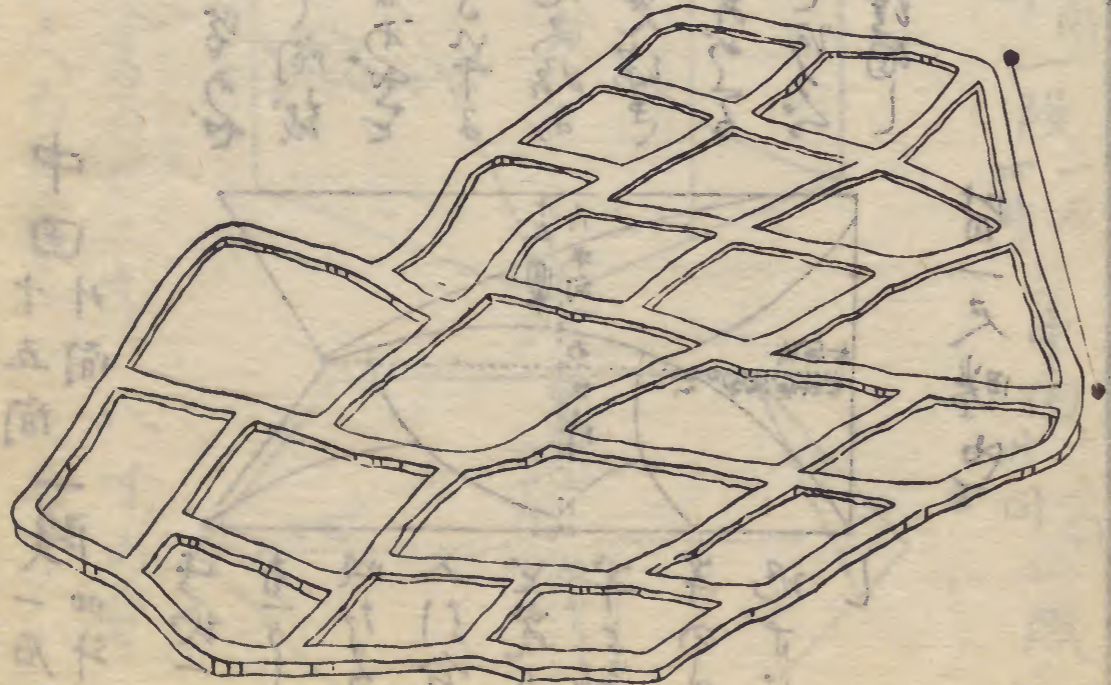
の

ふれと

めと

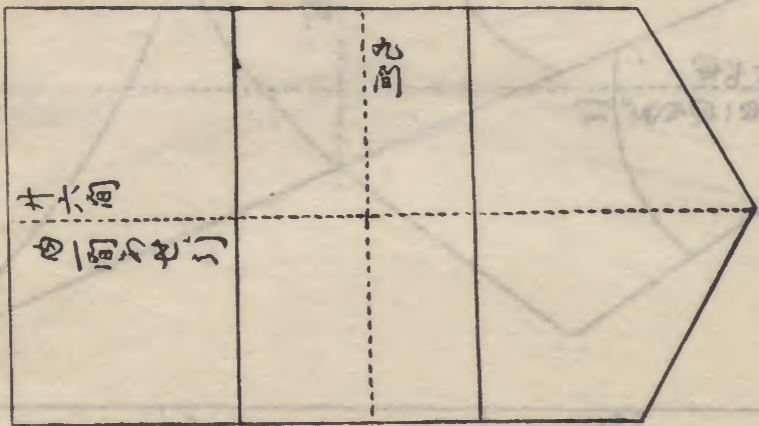


此景儀令ハ黒圈初見の
角の方子あはば羅針と
儀一第二の角と度里と
方向針盤の何分ある
と記し其間の長短と
索めく度里何分何尺
あると記し其周囲と
かくして度里終り角
方向并みするの長短と
記し後記しよりて
圖と記し準一尺と
きハ圈内何何何何
あつと漢字記あり



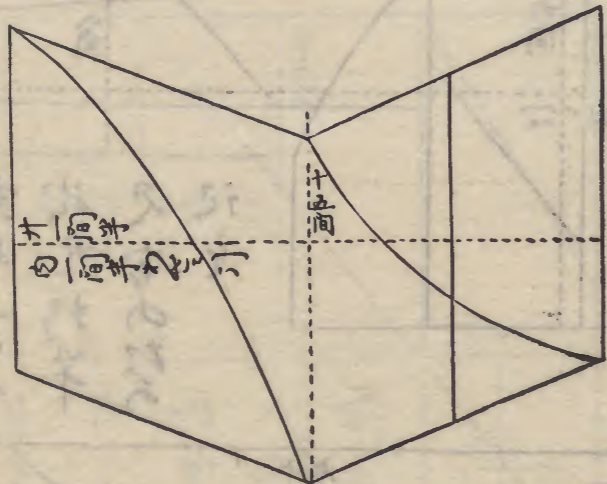
成形圖說卷之九

下田 九間 廿五間 七畝拾五歩 九斗



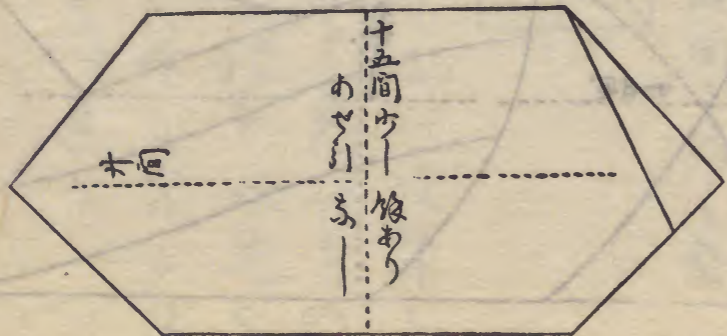
三尺高
あせ二
あり

上田 十五間 廿五間 一段一石 四斗



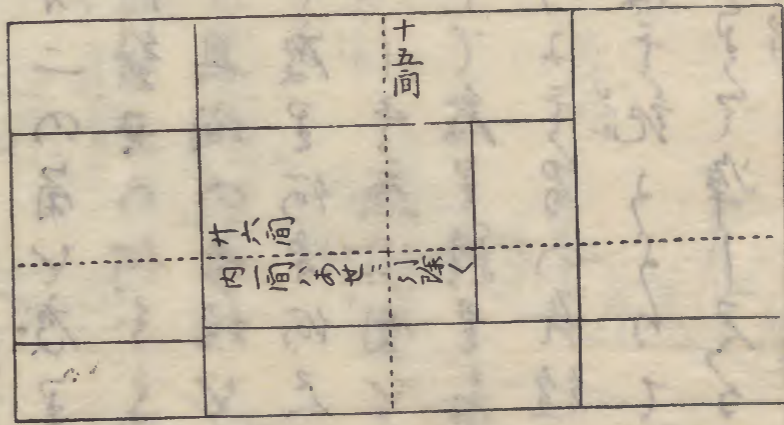
横三尺高あせ二
あり

中田 十五間 廿五間 一段一石 二斗



横三尺高あせ二
あり

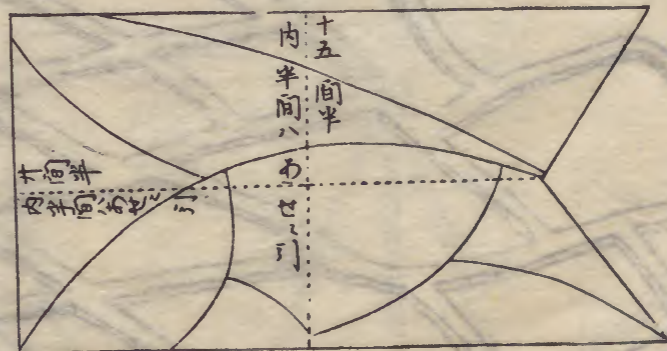
上田 十五間 廿五間 一段二畝拾五歩 二石



横一尺五
寸睦二其
お八寸の
小睦也每
圖は墨を
引ハあせ
来と引ハ
竿とあせ

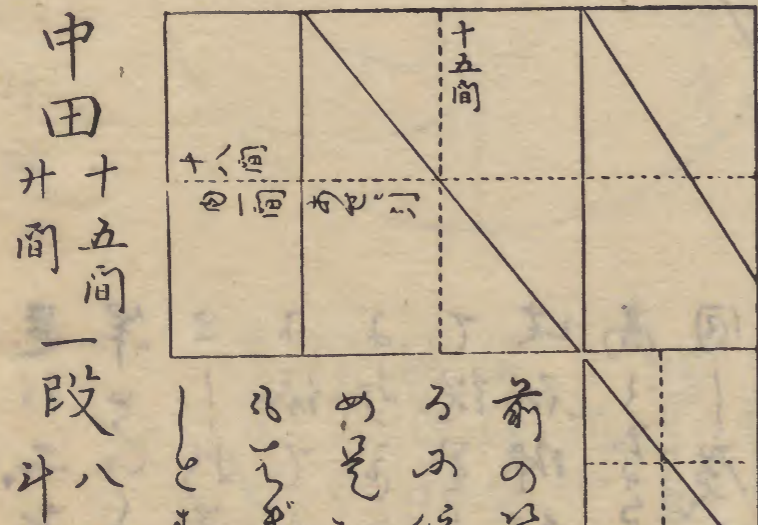
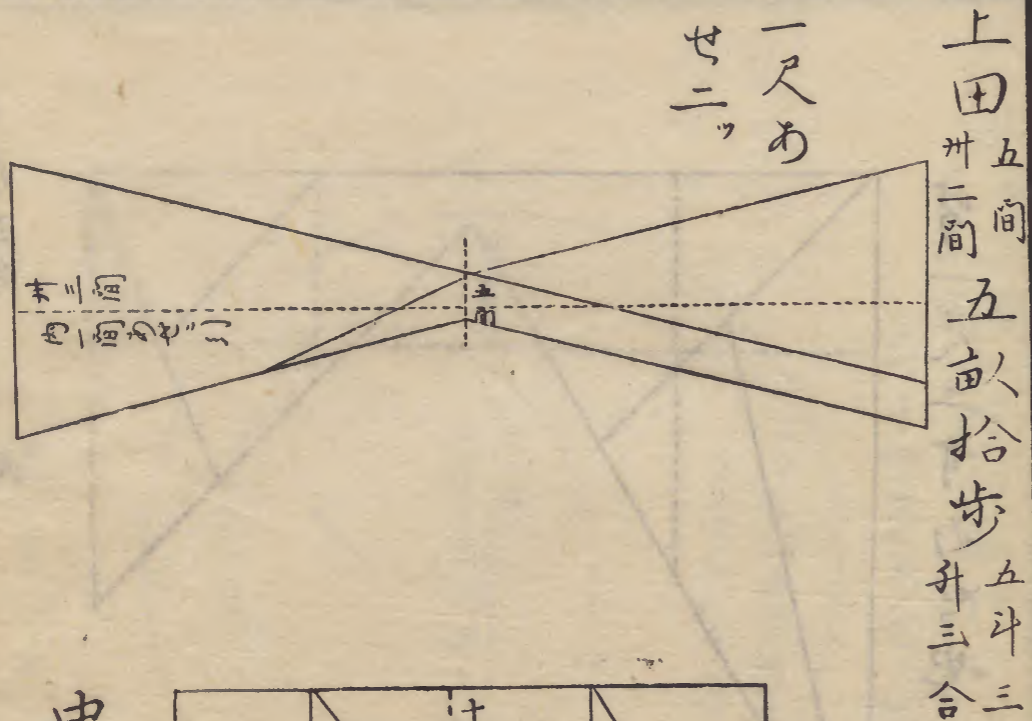
此畝ハ皆あせ
と終て間越
少後ハあせと
引くハ竿と
究る也又始あ
せと見違手
間と究る
竿とあせ
しと理同し

中田 十五間 廿五間 一段一石 四斗



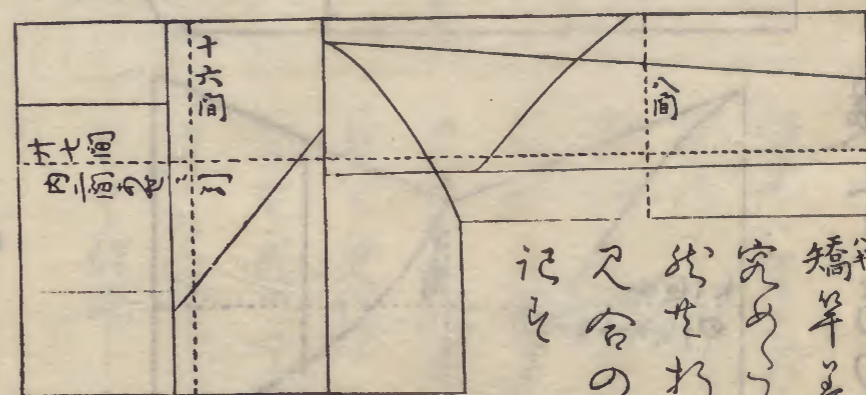
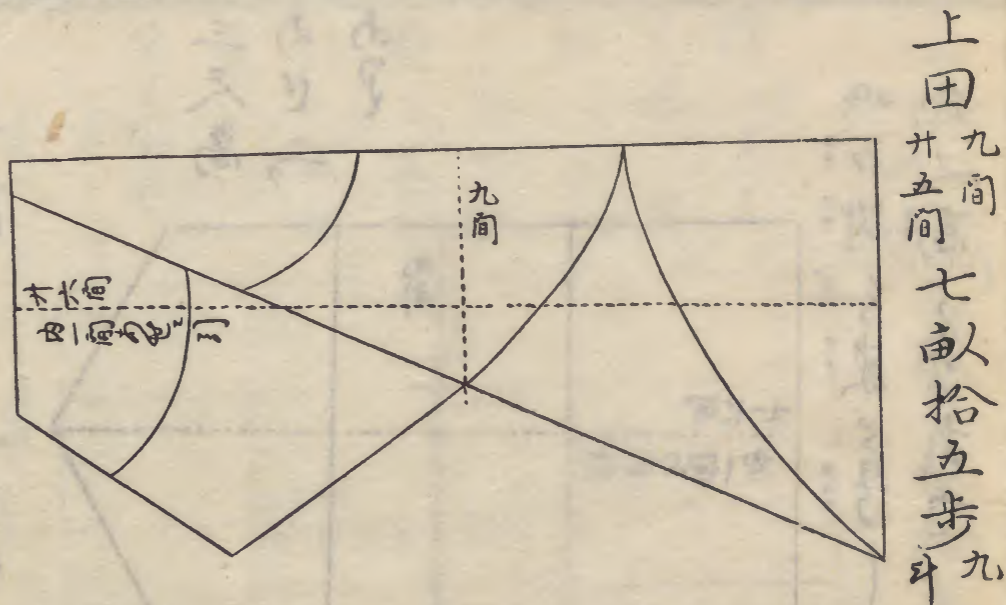
皆一尺睦也

此地一方界
直くは
此は
入引合せ間
と究るは
竿と号く
竿の
記す
し

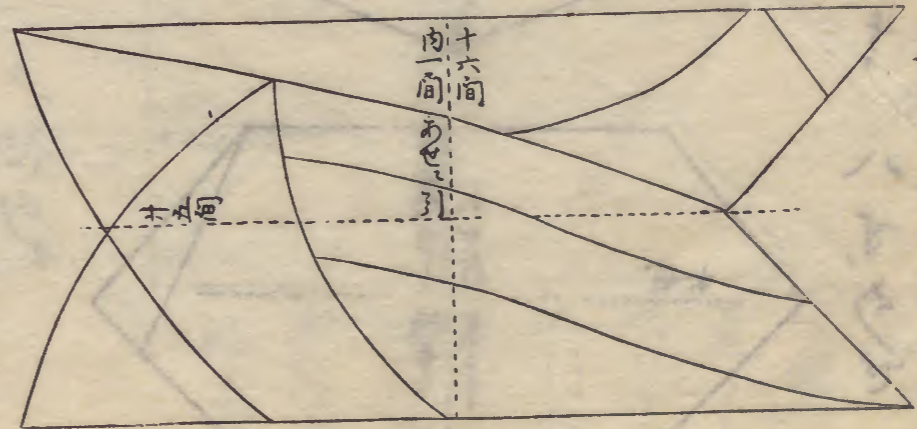


前の竿より八次竿とあ
るお縁て見合をのた
め是と記をぬ是より
はより竿より完る縁よ
しと記をぬ

此田さき彼間よりく也

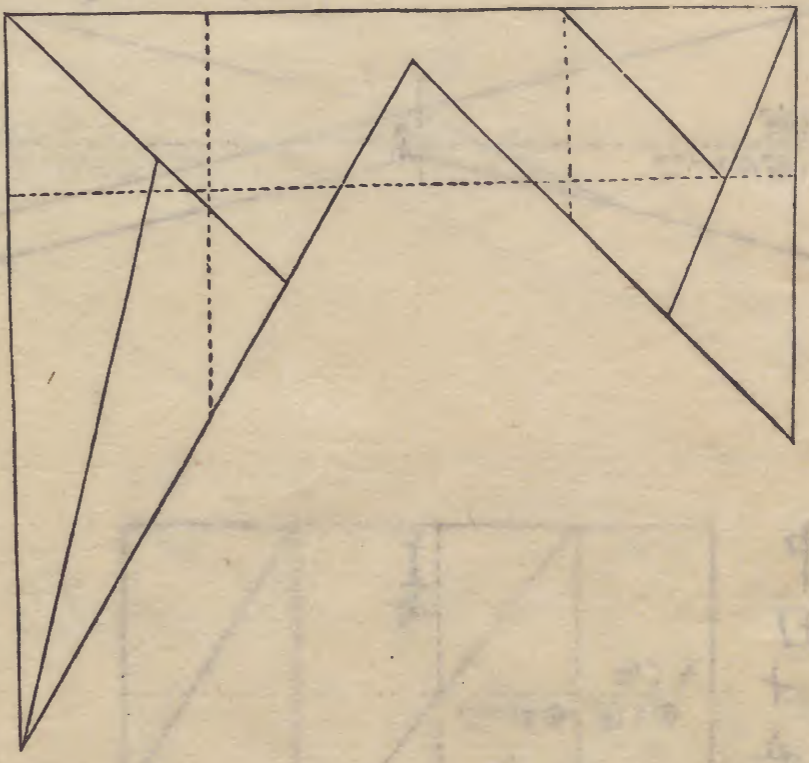


此田さきハ
矯竿と記
宛あつるハ
此を折竿
尺合のた
記と



皆一尺二寸あせ也

下田 十二間 一段 一石

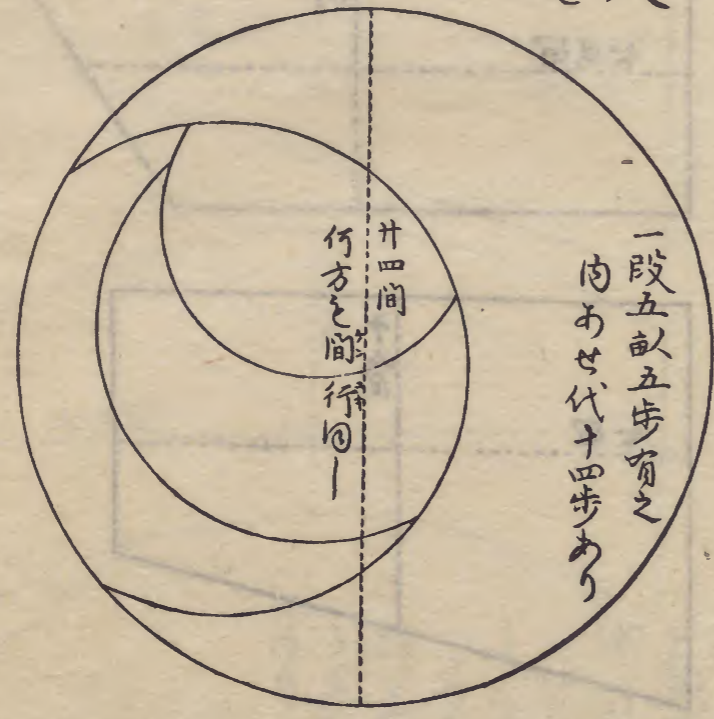


皆一尺二寸あせ也

是ハ二どりの折羊也折
羊とらふ事記さるが
こ一折羊遠ふりたる
よ依て如此さるハ二
よ折をあれバ二よう
て総里さるやとあふし
は石附を来と号一外又
高とさるふ也上村中村
同ノ度とて申村高下
ふあをかくのこも下
下村の田を準之

下田 井一 間一段 四畝 廿一步 八斗 八
外十四歩あせ 除く 井二合

皆一尺
あせ也



一段五畝五歩有之
内あせ代十四歩あり

井四間
何方を間行回一

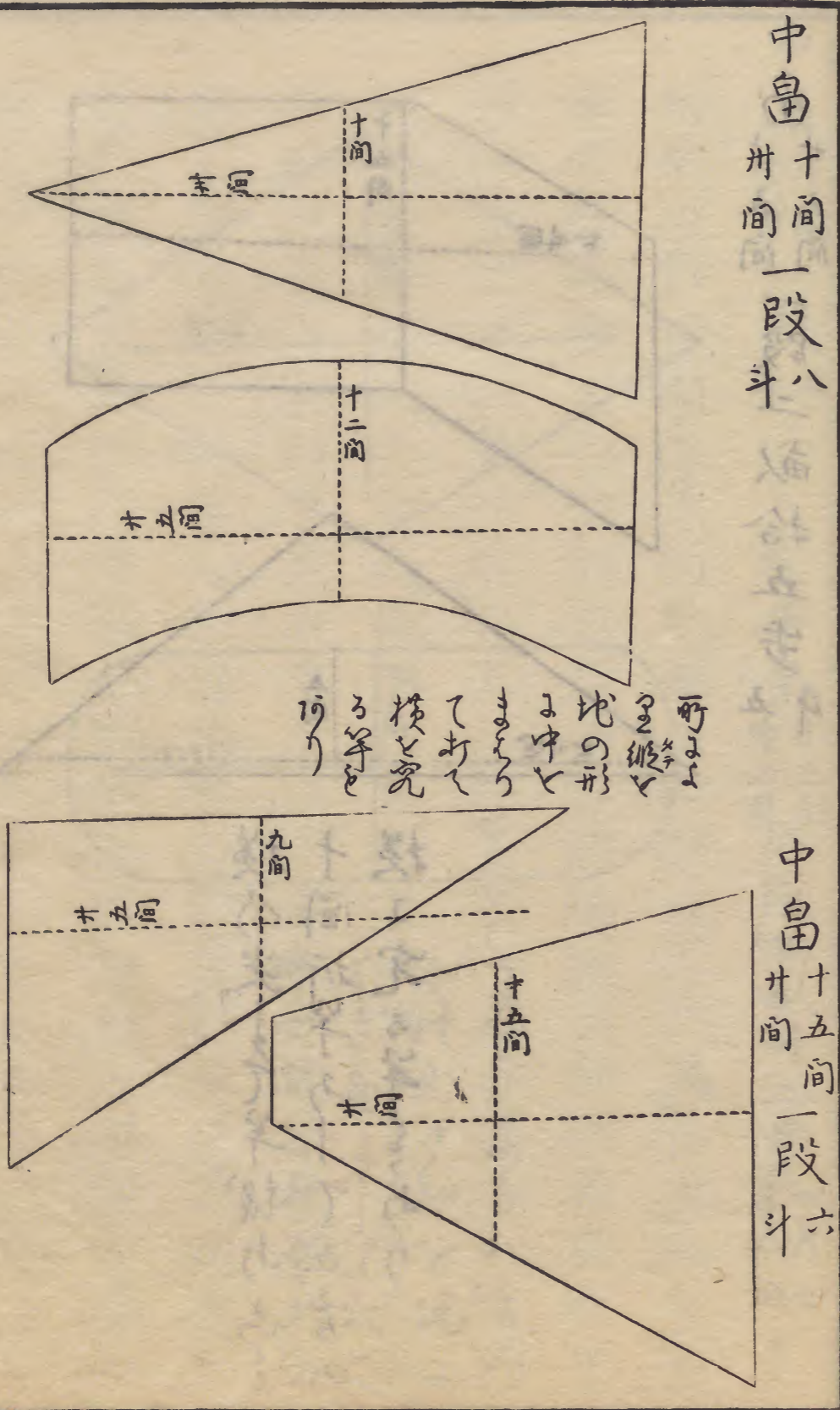
上村畠檢地 上畠一反一石二斗賦
中畠一反一石賦
下畠一反八斗賦

成形圖說卷之九

うやうなるハあせと引
除きぬはあしとたてよ
こ共一宵も亮る也是ハ
算法とて究る羊也
城もまに残りて如此
なるもいふハあせ又
あつとあつと新事あり

下畠 十二間一段斗六
廿五間

上畠 九間七畝拾五歩斗六
廿五間



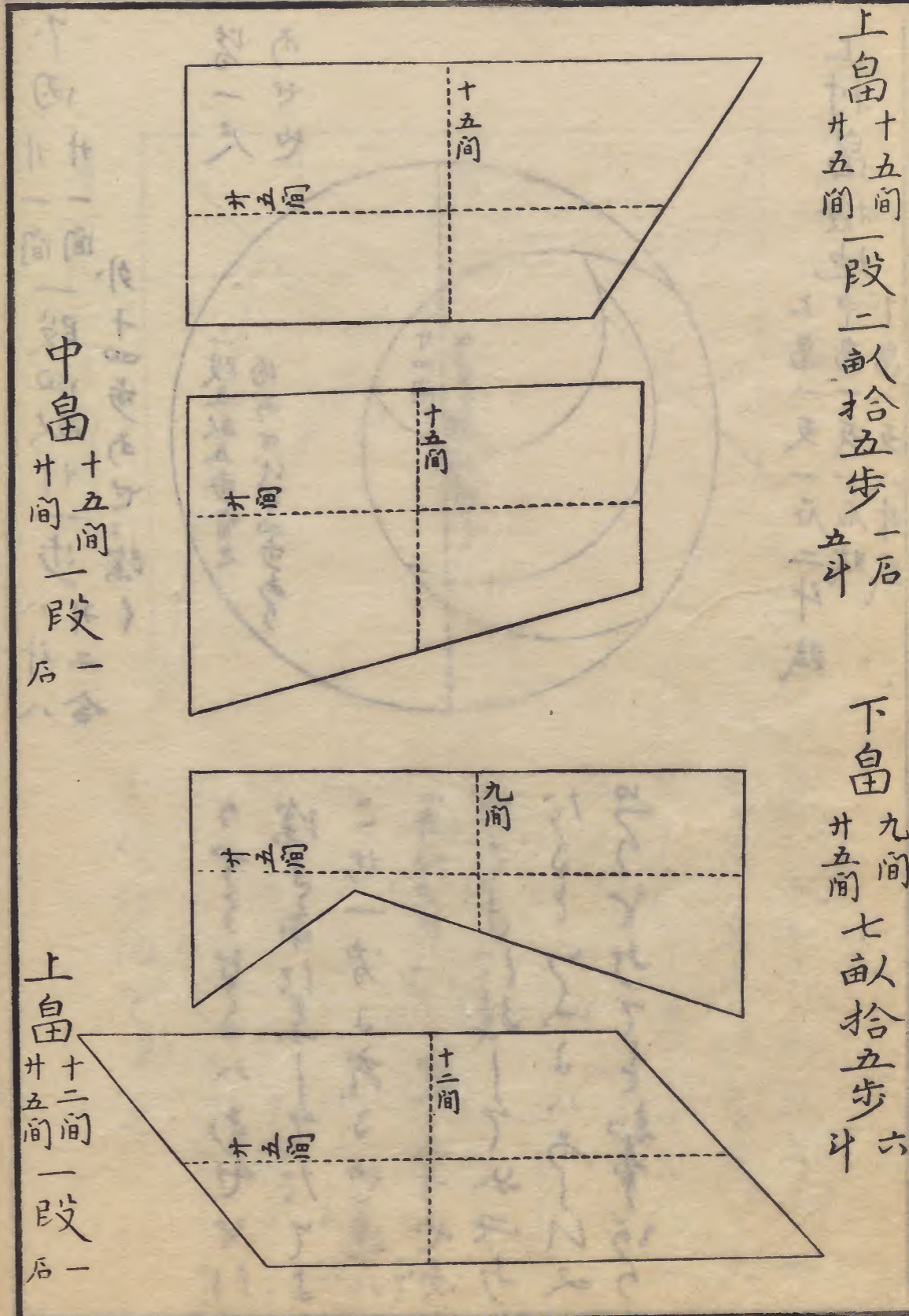
所まよ
里継ぎ
地の形
よ中と
ままら
ておく
横と宛
る字と
りり

中畠 十間一段斗八
廿五間

中畠 十五間一段斗六
廿五間

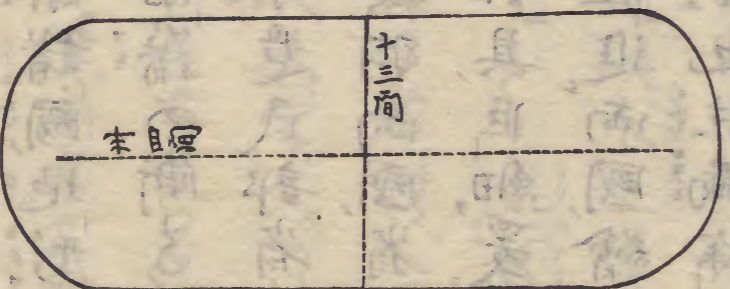
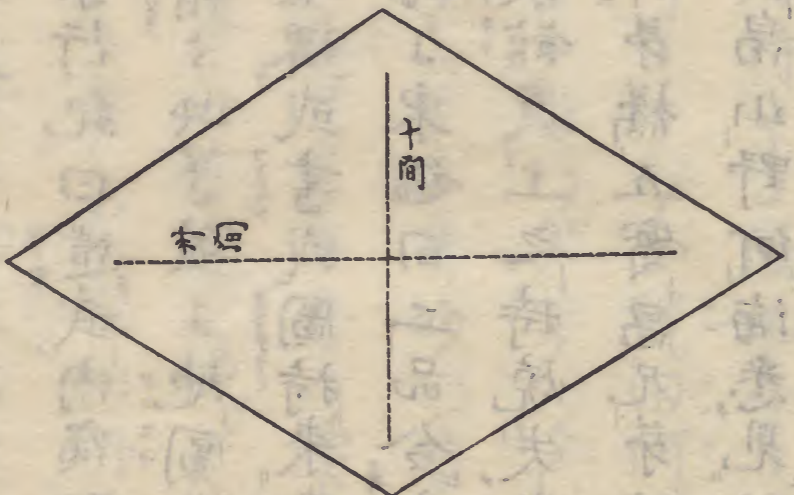
上畠 十五間一段二畝拾五歩一石
廿五間

下畠 九間七畝拾五歩斗六
廿五間



中畠 十五間一段一石
廿五間

上畠 十二間一段一石
廿五間

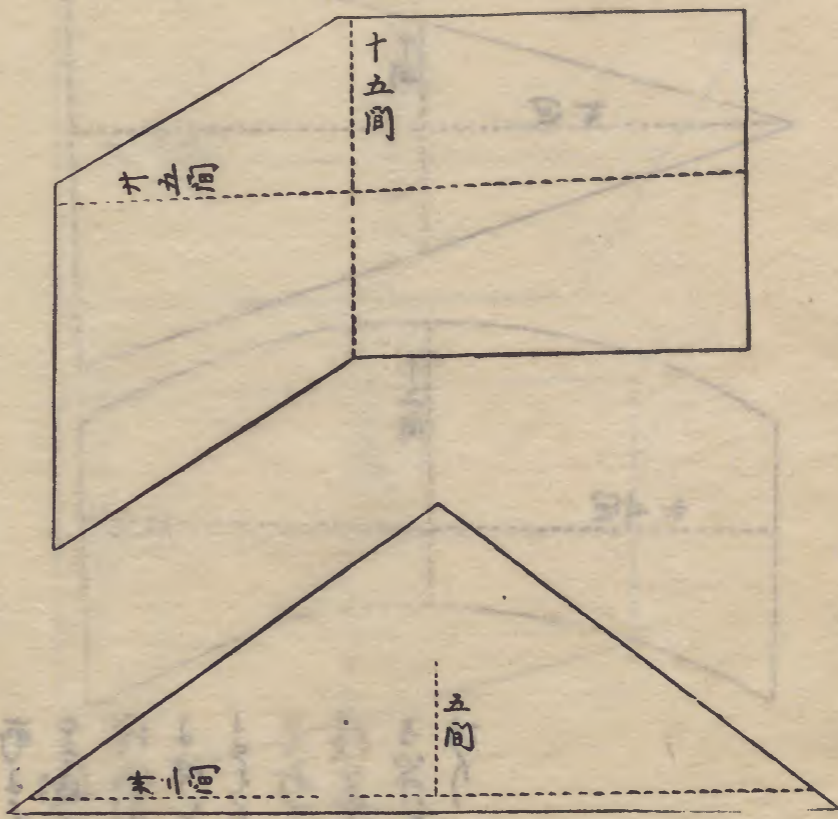


中畠 十間一段 斗五

下畠 十三間一段 四畠廿二步 斗四

り屋うまゝのふまろ
 三坤出さたし偶ふ
 ちさ角よりてたこ
 卅四間よりおるさり

下畠 十五間一段 二畠拾五步 斗五



上畠 五間五畠拾步 三斗七

横乃尖まて等城おまゝ
 十間折等ありて五畠の
 横に究る等もあり

里最初は文治五年御檢注加納田畑取帳とあり○延喜
式勘造授田口帳書生四百二人紙三千八百張又班田使
祇承屬一人從史生三人從書生十四人從各一人あり
凡常の檢地と致し奉り二人帳附二人勘定三人筆取
手使共八人程と一隊あり水帳と造るもの田畑附
の野帳二通并田畑附
の野帳二通并田畑附
百姓一人別の名寄帳以上三通は住之郷中一汲一管と
のより公義の野帳二通づつより物書二人一通
内者より野帳二通とせ筆取より田畑の間道何十
間何間と筆取檢者并帳附方と筆取
皆々守まひまきやうは帳に記さるる檢者ハ田畑の
畔と波取ふくまぬと筆取植る田畑はつづへ組
の宿不入一方より見分志すハ宿遠あふとありある筆

と植地境よくと立置繼と續く地方と西とあり○百姓
よ授る田地の内は各上々の美田一區つゝ向當おく
この也俗は大同様と云ふ此向と實は他へまゝ
ハ筆取筆取ハ筆取筆取ハ筆取筆取ハ筆取筆取
は金賃おどりの高ハ此の又山汲淺川汲水と云者
上田と質をぬむと云
の里者向ハ不姓より筆取筆取れども畝段の畝縮よ
かき筆取入立ものあり○定代の檢地と云物成よて
上よれもる米と下よ得る米とと勘へかてその畝儀輕
重けつとたハ筆取筆取筆取筆取筆取筆取筆取筆取
筆取筆取筆取○上見筆取の附ハ六尺筆取と四圍と
筆取の穀子と席と上せよと筆取筆取筆取筆取筆取筆取
筆取筆取筆取筆取筆取筆取筆取筆取筆取筆取筆取

と擬して畝町をのま何れぞと完る也○門割地といふは一村の門を畫表ありて百姓より親疎ありて田^{カカ}地と校割^{カカ}するありては田を完する所を年終て下田を賣里又下田を上田となりて高結物成の程を等かしむる由志中量の半と入て田地と割配各税則と年よと敷とつて酷吏をゆるちぎひ丈出とて公の益たるといふは反て和の倍克して百姓を傷ふものなり政刑大觀云自丈量至今已逾百餘年桑滄更易攤没無算是之く門割なきゆゑ田畑の乱るるもつて○或謂地化ハ百姓窮乏頃田税もゆるぎ一とて農史ハ品税

則の儀とのと其事とありとのゆゑ地化の完やうとあり志^シるものも不精ほつて流^ラるが村中^{キホヒ}と夫の勤とありかめり^カむるあり是事と執との忠告とげ^{カス}候^{カス}なりつて方法とげ^{カス}知^チ志^シじ^シ登^トる^ル次通鑑宋紀云及其既種有司履畝増^ス之故民皆疑懼と履畝ハ歩法とて畝段と完るものとあり○凡上村の百姓下村へ引移して上村の田と終ると以上村までハ出^デ候^スといふ下村までハ入^リ候^スといふ凡そ村名の者よわ^カら^ズして地より事りてその田地と終るとも入^リ候^スといふあり○祖の代は何百石ありてを子孫よりあり候^ス来よ^ク候^スその後檢地入るる時水牯口^ク魚^ノ石^ノ或^ハ或^ハの石と肩書

役顯宗紀 徭持統紀 ○通證 人夫 貞觀儀式 ○天武
紀 於保多加良

と割り今夫 夫足室町 夫凡人足

役丁 晉書 ○河拍齋集云民財空虛弊議仰惟國朝使民之
法除里甲正辨外如糧長解戶馬頭船頭館夫水夫馬

夫祇候弓兵皂隸門禁厨斗之類無所不役固已多矣但國
初法令嚴明編食有數故民力未至甚勞近年以來則常役

之外雜孤夫役紛々而出如所柴夫檣柴夫修河夫修倉夫
運料夫接遊夫站夫舖夫開夫淺夫之類因事編食蓋有不

可勝數者矣此他よ修備夫修隄 公役 荀 徭役 漢書徭
夫塘長の名明會典よ出よ 野役 同上若起野役遂

作 田役 同上太宰之職以八則 野役 同上若起野役遂
民至干遂之 運丁 仕學 運夫 夢溪 人夫 荒政
大旗之下 運丁 大衆 筆談 要覽

蕃名アトニデーリングデルホルツ

夫使民以時時以作事事以厚生不違農時等ハ皆民の農

際と時ありて公役と課とるふり皇極紀大兄王曰願

十年不役百姓以一身之故豈可煩勞万民哉孝德紀曰於

農月不合使民又曰凡仕丁者每五十戸一人以充諸司續

紀寶字元年詔曰自今以後宜以十八為中男子二十以上

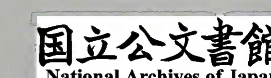
成正丁按書言故事註唐制男子二十一歲差丁役隋文帝

又唐書授田十畝歲輸粟二斛謂租丁物部氏曰蓋男子二

八而精通有為人父之道當是時士大夫之子志為士大夫

農工商之子志為農工商其無志者亦衆矣迺如昭公十九

有童心是也三十而受室受田始稱一夫前是則餘夫也
賦役令曰凡正丁歲役十日若須收庸者布二丈六尺一日
二尺六寸須留使者謂正役之外滿三十日租調俱免役日
少者計見役日折免通正役並不得過四十日次丁二人同



一正丁其丁起役之日長官親自點檢并開衣糧周備然後
 發遣若欲雇當國郡人及遣家人代役者聽之代役ハ即今
 の名代役と云ふがごとく申比より清負と云ふごとく
 もるも亦代役なるを和訓葉よりけめんハ保人あり未信
 編取保とあるハうげと云ふことあり民部式曰凡人
 生五男成丁免父課役雖一人闕猶役免除凡式は諸國
 毎正税の外修理料池溝料及堰河坊料と云ふものハ
 一切は田地用水の川溝墾塘等々の修葺雜費及夫飯
 米は充給儲の爲に差ふる事あり聖武紀に遠江國
 荒玉河堤決三百餘丈役單功三十萬三千七百餘人元糧

修築と云ふことありじり隋煬帝建洛邑毎月役丁二
 百萬人丁男不元以婦女元役と云ふ文獻通考より云ふより
 臨時の大修理を以てハ是れと云ふの夫役ハ最稀なるを
 通證曰 後土帝明應八年九月遠江洪水湖決して水涸
 成陸今名今切者其決處也歷代備考曰 後柏原帝永正
 七年八月廿七日遠州今切洪水高浪して濱名驛橋共ニ
 海中に轉没を成云山津波にて宝螺の出る事ありと云ふ
 まるごとく 聖武の御宇既ニ漫吹切かきと云ふ今教千人の
 役丁と云ふて田地等の繕修と云ふハたやと云ふことあり
 凡そ人吏と集むるハ夜四更より五更の官所ニ燎火と
 焚て味爽よりハもや櫛載と取入敷と標出と事清の場不
 小お出て各々よりと皆一令次是管監人ハ夙より夜より力と

竭一煩と志とていふも其功の後とて
一月と志とていふも其功の後とて
用は且ハ後の世までと行はるるなり
なりや唐書に孟元陽為曲環軍中大將環使董作西華
屯元陽盛夏芒履立稻田中須役者退而後就舍故其田歲
無不稔軍中足食とて人足るる續貫行曰人足と出ハ大
勢の集るる志んは安して五時採と弱とてと四
時頃来り是村よりハ昼過ぎるとく連日一日は夜候こと
と三四日わたり人足は志を費ゆるる組合の村役人法合
一法負と附人とて人足は志をハ用積入れと取らざるは

とて法負つ後して水利方子法を以てはり昔ハ
役とて一領村の力と持て川除道橋揚を揚引の役或
勤りともやうな成りやハ村々との組合成れば
おろろ組合ハ法事承いこるよつて合何とも云合の志
とあるぬやハ不晴るよとて用あるハ何方よとて十と
引瓦ぐつき決り此は法負とてれば水ハよく引て
村々ハ平均あるなりとて大なる門を引て決と
ハ魚魚の村ハ下村あるなりて引よはる水口村の田ハ
不足なくわたり又ある村ハ上村あり引あるればお
のりり流とあるべしとて是を水原の村と同一也

うは村役人も婦人等と不精なる者あり又是れを
不坊なりいふも一各主の害なり福元も是れ五人と
福元ハ三人とせし定らば役を欠て村方ハ働やうは
とれども其ハ我ハ村の事と引田地なく己うあるは
はたゆめはあて福元ハ是又ハ法も方違せて村
村事なりゆきありぬ主組郎以味をる○夫春ハ耕
僅ハ秋ハ之のりも收め且ハ米と通一川と海へ又ハ海
江と流き山野と冥き地と修め陵と平ふと子のとど
何ふるありあき凡ハ席上の軍議とふるくも場
就て其功と彼方の実像と踐むハ空論なる○前

謂^{ウツタ}漢^{タイ}貞^{フシ}とらふと田^カ地^チ川^{カハ}濬^シ土^{ツチ}木^キ運^{ウツ}輸^ツ等^トは
て助^テ役^ト修^ス管^スとて官^ノ金^ヲと納^メて官^ノ金^ヲと以^テ支^ス用^トと償^ハ
あり又高^ク買^ハの徒^ニ官^ノ金^ヲと請^フて金^ヲと百姓^ノより募^ル出^スさし己
の「^カ」^キとて其^ノ用^ヲ事^トと包^カ辦^スあり其^ノ中^ニより取^ルて
利^ヲと射^ルの計^ヲと多^クとせし後^ニ世^ニ多くと冤^ハ屈^トと被^ルる少^カ
らば大學^ノ衍^シ義^ヲ補^フと樸^ノ買^ハ者^ハ通^シ計^ヲ坊^ノ勢^ヲ該^シ得^ル税^金總^ノ數^ハ俾^ル高^ク
先^ニ出^ス錢^ヲ与^ハ官^ノ買^ハ之^ヲ然^ル後^ニ聽^ル其^ノ自^ラ行^フ收^メ税^ヲ以^テ為^ス償^ト也元^ノ初^ニ有^リ
銀^五十^万兩^ヲ樸^ノ買^ハ天下^ノ差^ヲ發^ス者^ハ有^リ以^テ銀^五万^兩樸^ノ買^ハ燕^ノ京^ノ酒^ノ
課^者有^リ以^テ銀^一百^万兩^ヲ樸^ノ買^ハ天下^ノ河^ノ泊^ノ橋^ノ梁^ノ渡^口者^ハ耶^律楚^ノ
材^云此^ハ是^レ姦^ノ人^ノ欺^キ上^ヲ罔^シ下^ヲ為^ス害^ト甚^ク大^ニ咸^ニ奏^シ罷^シ之^ヲ樸^ノ買^ハ此^云

運めりて水陸乃事多しと云々一按毛詩執官功註
 功葺治之事也或云公室官府之役也王制云用民之力歲
 不過三日是也賦役令凡正丁歲役十日とあり然りと
 和漢書よひりハ農を回しく軍役を勤しむ賦をれば
 之附の農ハ耕作のくくをり士ハ吏務軍事を知は各
 分ゆ急ち今一撮よハいとも素直と遷改して諸倍
 諸工匠あり又僦者傭僱高僧漁獵をく民戸の等分析
 教浪とちりさうはく揚丁夫の役あり若ハ百姓バウリ
 ありバむりりのぶく歳を三日十日をどの公役とい
 ふよのいきてま一日よと三度一月ふと十度ふと
 馳

従らざる者一申おまごハ一月ハ三度の役ありと云
 患とせしよしと云ふ三度のハ三度の役ありと云ハ十二
 度とあり十二度の乃ま廿四度とありは氏いぐ
 命よ場と重し續紀曰無知百姓不閑條章規避徭役多有
 逃亡涉歷他郷積歲忘帰其中縱有悔過還本貫者縁其家
 業散失無由存濟望請能悔過帰者給復一年継其産業建
 武二紀仕丁役事以十町田地毎年一日役可令勤仕也
 とありと云れば 後醍醐天皇の御宇ハ一年一度の
 夫役と云ふと云えと云ふはゆき足利氏の時ハ一ヶ月
 八八九度の課役と云ふと云ふは未嘗の難儀とい

いふことよりいふは平記に當將軍義政卿の御代と
して一年深役算より深大嘗會とあり十一月九ヶ
度時と掛らるる二月八ヶ度及び一ヶ月に
民饑死と著し都鄙一般に徳政の敷訃と企りたるに
武家より小借金と商人より小借金及び
ば息是と免されて今及て二十三度まで徳政
と行い進みたるは貧人富人衆樂と回せざるは是
より富者一錢と乞ふと助るるを多く似僅はつと
録てるるに應仁紀に麻苑院義満の御代に倉方四家にか
りり善廣院義教の御代とありて倉役の時時志りて

アミうは借債と称んとて前代未だ徳政とありと
出して此時代はサニ度まで行われ倉方を地下と
皆絶果て天下ハ一破と破るは昔ハ滅ハ滅よと
え室町日記天文十六年義輝御領百姓の訴状に夫是止
となく勤者より依て十ヶ年より三ヶ年一とてハ叶
いごととあり讀史後論に倉役とありハ富商富民
よりめけて録かりありとありかく國用乃不足と
るるハ皆是上一人の驕奢に由り其流弊下民に極
て怨者ヤ一所の禍終よも一人に帰するものやと
里又東鑑に段別の錢公田十町に付後若干とあり

凡之儀久記に國々に守護と云き郡郷と地頭とを一段
別兵糧と充取る内領家ハ地頭と云ぬと地以ハ領家と
あつと建武記曰町別錢貨人夫傳馬事稱先例被懸百
姓之條不可然向後以撫民之儀可為領主之所役應仁記
ハ一段別棟別と色々の様とあつて遺責とれバ必々の
名主百姓ハ耕作と志地と田畠と捨てて食ハ是の任
てとてつとありじりより出浪出級ハ百姓の羅物
しとてかくのぶとて或書ハ百姓の出浪ハ大抵田一段
ハ金子二分或二分二銖ふとの租と通例と云ふは
たのりふと大莊頭ふとて出浪と云ふを有りといつり

夫農の物奉と云ふハ米穀をいそと米牙ハ零糶と
るハ豊年の時ハ米價賤して又凶歲ハ米直騰貴とい
つと市ハ鬻ぐと云ふの粟顯ふ一受農の苦ハ新米と
事と云ふと云ふハ民の課役免さつと云ふと云ふハ
の恒係とて申不就て 仁徳天皇浪華高津宮ハ都一玉
ハ浪速上古圖説曰高津宮ハ舊址 登高臺遠く眺望と云
ハ今の東高津村高京の地なり 乃詔曰烟氣不起於域中以為百姓既貧而家無炊者封
畿之内尚有不給者況乎畿外諸國耶自今之後至于三載
悉除課役息百姓之苦自是日始黼衣鞋履不弊盡不更為
也過飯煖羹不酸饒不復易也三稔之後諸國悉請曰課役

並免既經三年貢稅調以修理宮室然猶忍之不聽矣十年
甫科課役以構造宮室於是百姓不令而扶老攜幼運材負
簣未經幾時而宮室悉成故於今稱聖帝竟宴和歌集天慶
六年 仁德天皇と詠む師輔の歌 大鷦鷯天皇がよ
りし山煙天のいつきともえほゆる其三年ハ尚有至
一十年課役と免されしと豈奪じしとの謂あり
や帝の聖とる所以なるを七錄齋集賦役論云以版
籍天下之甲兵以墾田定天下之賦稅國家之定制也而因
時通變之道亦存其中唐之租庸調租出於田調出於家庸
出於身令不煩而易守而又有役二十五日役三十日之所

免水旱蟲蝗十損四十損六十損七十以上之所免則周官均
節之遺也然兵興以後籍亡而征重其勢不得不從於地斷
此揚炎之改租庸調為兩稅與張說之改府兵為彍騎未可
同日而論也 畧夫宋乾道之時汪灌一松陽之民首倡義役
役先後視籍田多寡視等行之三十年訟不抵於有司而謂
太夫師長不能叙建規模成循理之鄉信義之里亦天下之
所不信也是故仲尼不對季孫之問田賦漢高怒責蕭何之
治未央萬世之計皆慮之於微而究之春秋所書宣公之稅
畝成公之丘甲哀公之田賦惡其大變古而亟思復者惟在
周公之典則今之所謂周公之典者何為乎郊祀之戶籍薦

天大誥之峻誅賊吏亦其意也

天大誥之峻誅賊吏亦其意也
典書 天大誥之峻誅賊吏亦其意也
典書 天大誥之峻誅賊吏亦其意也
典書 天大誥之峻誅賊吏亦其意也
典書 天大誥之峻誅賊吏亦其意也
典書 天大誥之峻誅賊吏亦其意也
典書 天大誥之峻誅賊吏亦其意也
典書 天大誥之峻誅賊吏亦其意也
典書 天大誥之峻誅賊吏亦其意也
典書 天大誥之峻誅賊吏亦其意也
典書 天大誥之峻誅賊吏亦其意也

成形圖說卷之九終

成形圖說卷之十

目錄

儲蓄

御廩

假貸

成形圖說卷之十

成形圖說卷之十

農事部 儲蓄

多久波比

書紀○神功卷聚斂土物とも仁德紀

曾奈返

天武紀諸王及百寮預兵及

加久不和名鈔栴

めり今言

加

多米留

和訓栴子蓄積と云ふも後撰栴

て在のうま

加

多米留

和訓栴子蓄積と云ふも後撰栴

儲蓄

周禮○管子國有十年之蓄而不積貯前漢食貨志

積貯積貯者天下

之大命也苟粟多而

畜積周本紀后稷時行者有資居者

積貯積貯者天下

食貨志堯有九年之

水湯有七年之旱而國亡損瘠者以畜

積貯積貯者天下

以備

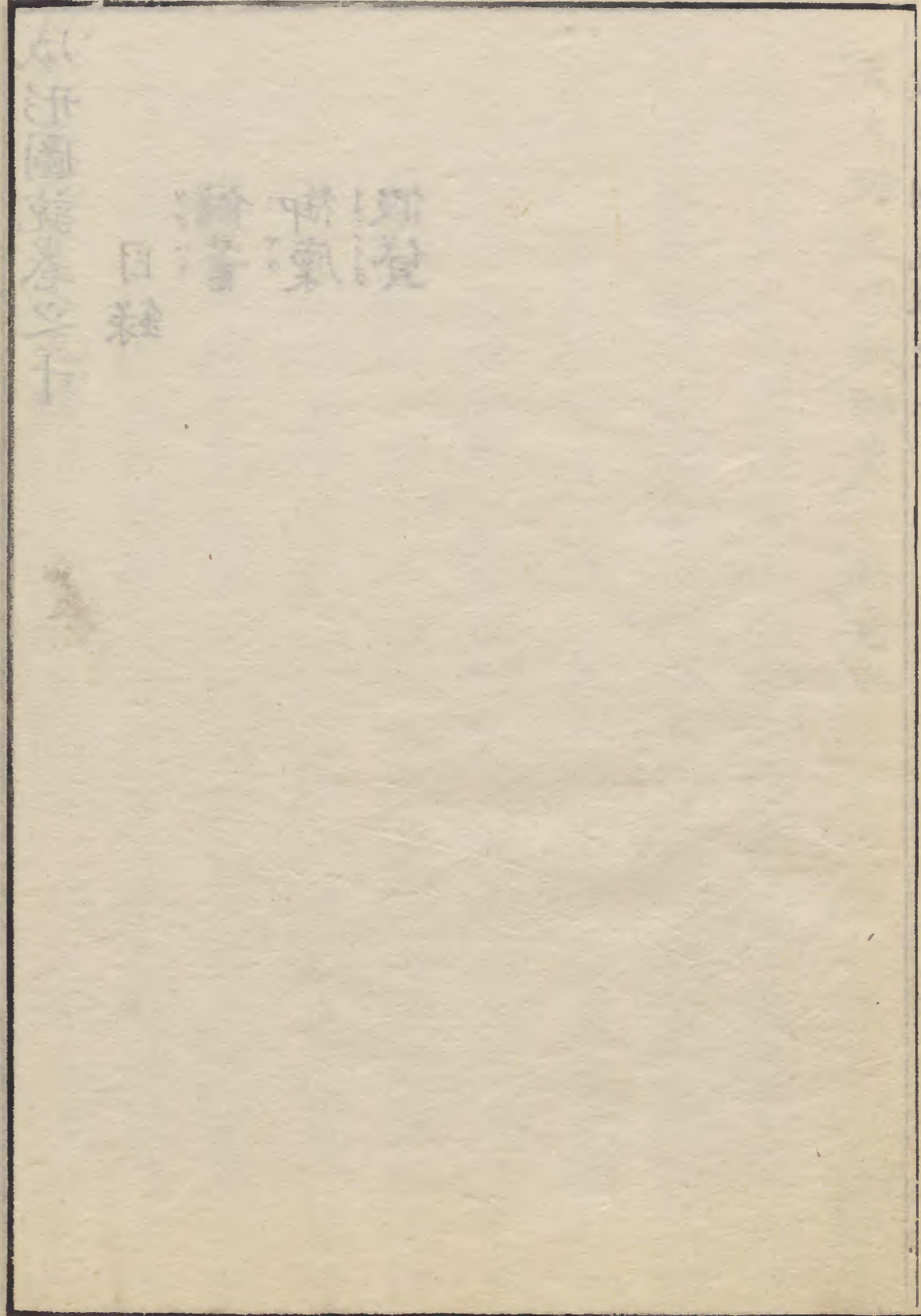
積儲

淮南子十八年而有九年之儲

委積韓詩外傳

成形圖說卷之十

二



多日 積蓄 史蔡澤傳 力田積蓄

廩蓄 唐劉蕡傳 廩蓄不乏

儲胥 前漢楊雄 傳註有儲

蓄以待所須也○字 典儲胥猶言御苑

蕃名ホー ルラドコールン

宣化天皇詔曰海表之國候潮水以來賓望天雲而奉貢自

胎中之帝泊于朕身收藏穀稼蓄積儲糧遙設凶年厚饗良

賢安國之方更無過此今あらしハ隅の陸もあつて

なほかゞやくものこそあつて四の海のかにおよび殺斃

ふと國もよまらて牛と馬と息ふたれしハかこ

びる魚くとあしあひさておほくかといやまひ煙

線屋ておほくきくととばあしの海あつてと遇ふあひ

ぬるらと語らハそおほく思ひ志しあはは夫

源と開き流と通らハ財と生の大過あして用と節ハ

し蓄を禁しハ帝王乃美酒とや年極大晦ハ四月元

日より志れらる事あつて元節の事ハ大つたてを小

まゝにハやうく一年の計ハ春はなりさるは一

生の計ハ即今もちりともいふ事し 五の節部り元日の

事さしに似せれともいふ事し 儲蓄乃ハ凶歳乃備と豊年

乃時よあし事さるりの事あつて今日乃よそなふ

ともり古語も富足生於儉約貧困起於奢侈とあり干

里の遠もあつハ一歩より進と江海ハ小き流の積もる

ハ主恩と指ん為りけり農工商ハ又母より更し資産と
墮し破られしとせむるおとされし君子の道とせむる
とこの名理をゆふせり考ふのききたるはよ各藩鄙者
へ偏るものハ金銀と修計は貯へ巨萬と要領とを饜六
とふまじくはあつてはまじり合せてよかざし河れ
らふさも何くバあまふ不精といふ一づつ一づつ義理の
屬と手免と減はあつては不義ともふ義とふらつ
くと終身金銀利の爲よふと等し人生百年と期する
は空しく千歳の壽と抱き必ハ徒と草木と同しく枯落し
て後己との多し小人めとこの名譽と儉約との境と踏

ちりて炭と稗米と穀とて積粟朽貫るもとあれども
人の急務と郵まは私の安便のくは貪るも人都良香の
記は凡情の愚ある只世路もつあつて惑の上よハ醉
とあり碎の裏にまどろし無乃中よ死とふとせむるし
るむり一ね水浮ぶらるる転用金を多門乃城は貯へる
て何時いふれらるる愛ありてと氣をいふとありらるる
と御氏せよとまわつてつ時は滅亡を招りらるるごとく
鹿臺の財鉅橋乃案を聲時のふぬまは佳王の炭炭とな
しゆらまは河とどや齊明紀は大起倉庫積聚民財長穿
渠水損費公糧ハ政の失あり史記は孫弘常称以為人主

病不廣大^ニ人臣^ハ病不儉節^トとんえし嘗豊大同の時金銀と
大分^ニ花^ニ納^ルは能^キ士と宰^ト押^シ込^スよい^ニき^テて^モ
度^ニま^テ花^ヲ拂^セれ^ル金^ノ浪^ノ残^ルと^モ曰^ク民^ニ配^カあり^テ天下^ハ
天下^ニ比^シ天下^ニあり^テ一人^ノ天下^ニ非^ズと^モの^ニ語^ルよ^シと^モ
と^モや^シの^ニ語^ルは^シつ^ハ一^毛と^モ抜^テと^モ上^ニ
收^メて^ハと^モの^ニ迷^ヒと^モ飲^ムと^モ何^レも^モ新^珠玉^を
と^モ下^ニ浪^ルと^モの^ニある^ト何^レも^モの^ニ并^カ動^カを^モ謀^ルと^モ水^を
汲^ルわ^ルは^シや^シと^モ輸^ルと^モ教^ルと^モの^ニ國^ノ是^トお^シと^モ
天^ノより^シ生^ルと^モる^ト五^穀と^モ始^メと^モして^ハや^シの^ニ法^物と^モ神^獸と^モ
く^モ耕^種し^テ收^メと^モ爲^スし^テは^シ付^ル是^レの^ニわけ^ノ收^治の時^節と^モ遠

つぎ^にや^シの^ニ暇^体の^ニ修^ムか^ハわ^シせ^テ下^ニ知^ルは^シ修^ムく^ハ
る^ハ修^ムと^モあ^リと^モむ^シり^一伊^達家^ノ有^司領^分の^ニ言^ハふ^ト
か^ハ一^用金^と課^や一^中將^吉村^朝を^モと^モ上^ニより^シ
下^ニと^モあ^リと^モ下^ニより^シと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モ
と^モ一^首の^ニ歌^とよ^シて^ハ示^サれ^ルと^モを^モ建^シ國^ノの^ニさ^の
甲^斐や^あし^のめ^をと^モあ^リと^モ民^ノよ^めは^シと^モあ^リと^モあ^リと^モ
め^でと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モ
を^モ直^トと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モ
主^トと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モ
祿^ハと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モ
と^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モあ^リと^モ

其奉養心願て其職分よき^{まが}い玉て天下何もの人々其
所^{ところ}を^さざる者あらんやと^いひ宋范希文嘗自言吾每
夜就寝^{ツキニナレ}為計^{ヒケル}一日飲食奉養之費及晝所為^{スル}之事若相稱之
則^ナ軒睡^{ハキチハシ}熟寐^セ無復愧耻^{モアハ}苟或不然^{トモエカラ}終夜不能安枕^{シタ}と^いふ
里^{ウラ}以^ヨ貧^ヒし^けし^は時^{トキ}毎^{トキ}と^いひ^し人^{ヒト}事^{コト}世^ヨに^まし^く人^{ヒト}よ^しと
^{コナ}た^ナ言^{コト}か^けま^しと^きく^けあ^らる^もつ^ひの^をや^めぬ^胡魚^ナ
夕^{ツキ}菜^ナの^營法^{ホウ}へ^烟く^ちぐ^くく^しひ^の火^ヒむ^くよ^のま^ごこ^が
れ^つ親^{オヤ}子^コ弟^{イモ}妻^メと^あの^日難^{ナリ}乃^ハ服^ナく^もて^あは^な暖^ムま^く
ど^夏の^夜ハ^蚊甚^シ火^ノの^いづ^りに^あら^うく^あら^う者^ハい^い
く^あら^う俗^ノ約^セは^くお^もい^はる^もあ^らう^も俗^ノ約^セと^いふ

貧^ヒは^僅々^ニ五^十と^いふ^のま^はれ^うも^世と^いふ^衣の^食の^の
み^傳ぐ^もく^等と^いふ^情と^會て^あら^ない^の命^ノと^いふ^事
も^らく^はは^らは^らの^徳蓄^ムと^いふ^事は^古語^ニ
禮^レ義^ニ生^ル於^テ富^足盜^竊起^ル於^テ貧^困と^も又^ニ衣^食足^レ而^シ知^レ榮^辱倉^庫
稟^實而^シ知^レ禮^節と^管夷^吾う^いひ^しる^おと^やい^ふ
此^レ田^義倉^乃儲^はか^らは^らる^もの^ため^に負^はれ^し急^は
救^ふの^用意^あら^ずて^式に^調急^田と^もあ^らう^もあ^らう^も
の^中を^なる^も困^窮と^いふ^人の^口は^編く^眼に^給は^ら
し^める^やら^ぬは^上より^とあ^らう^もあ^らう^もあ^らう^も
下^{より}治^獄の^惡と^あり^ふハ^ある^まし^きふ^くて^世と

帰對梨渦却有情世上無如人欲險幾人到此誤平生又哥
子陸葵の安達の夫弓引志ありて地よたどれぬあつろ
とむけ○井田類說云三年耕則餘一年之蓄故三年有成
成此功也故王者三載考績九年耕餘三年之食進業曰登
故三考黜陟再登曰平餘六年食三登曰太平二十七歲餘
九年食然後至德流洽禮樂成焉禮王制曰國無九年之蓄
曰不足無六年之蓄曰急無三年之蓄曰國非其國也又曰
三年耕必有一年之食九年耕必有三年之食以三十年之
通制國用雖有凶旱水溢人無菜色然後天子食日舉以樂
といふは是とよせざる年より歎まはれぬの蓄ちき

と不足とあまとなつは修りよせざるめは利りよせ
やまもゆるあつて夫湯武以諤々而昌桀紂以唯々而
亡とて湯武ハ正直ノ諫者ト譽して國治つて桀紂ハ
何事も治まらなむ根とけりしを道て何と畏し
くらむらふ因亂朝ハ治言多く治朝ハ亂言多しと
て亂朝ハ吾人國法を平とのと使ひ唱へ治朝ハ上
下相親して敷亂と防くの言多しと云はれや天災地變ハ流
りきくは氣運あるものありハ治く謀り預め備ふべき
事よくと守道く治るよ享保十七天子の歲西海道乃疫
癘と歎傑よ吾妻小倉の内男女七千人死疫候あり肥

前代^ノ智^ノ内^ノ男^ノ女^ノ十二^ノ万^ノ餘^ノ口^ノの^ノ疫^ノ候^ノ死^ノあり^ノ又^ノ最^ノ新^ノ國^ノ内
 凡^ニ二十^ノ六^ノ万^ノ七^ノ千^ノ八^ノ百^ノ餘^ノ口^ノの中^ノ男^ノ女^ノ疫^ノ候^ノの^ノ死^ノ人^ノの^ノ方^ノ六
 千^ノ七^ノ百^ノ二十^ノ口^ノと^ノ記^ノを^ノ傳^ノへ^ノり^ノ也^ノ其^ノ上^ノより^ノ同^ノ十八^ノ年^ノ冬^ノ也
 の^ノ夏^ノの^ノ月^ノ次^ノより^ノ秋^ノの^ノ半^ノまで^ノ日本^ノ國^ノ中^ノ一^ノ統^ノの^ノ疫^ノ病^ノ流
 行^リて^ノ大^ノ坂^ノ三^ノ江^ノの^ノ市^ノ中^ノより^ノて^ノて^ノ風^ノと^ノ類^ノを^ノ若^ノん^ノ中^ノ三
 万^ノ七^ノ千^ノ四^ノ百^ノ十五^ノ人^ノと^ノ點^ノ檢^ノせ^ノり^ノ也^ノ其^ノ時^ノの^ノ米^ノ價^ノ一
 石^ノ百^ノ十^ノ四^ノ兩^ノ乃^ニ得^ノ滿^ノあり^ノと^ノい^ノつ^ノと^ノ是^ノ等^ノ降^レ喪^ノ饑^ノ饉^ノと^ノ賦
 る^ノが^ノこ^ノも^ノ未^ノ嘗^ノ有^ノり^ノ大^ノ荒^ノを^ノて^ノか^ノる^ノも^ノ人^ノの^ノ力^ノは^ノ
 疫^ノ勢^ノよ^ニお^ノよ^ニて^ノ疾^ノ患^ノを^ノ恐^ノ風^ノ青^ノ氣^ノの^ノり^ノて^ノい^ノれ^ノ來^ノて^ノハ^ノ米^ノ穀
 と^ノお^ノの^ノつ^ノり^ノ不^ノ熟^ノと^ノそ^ノれ^ノ故^ノ停^ノ享^ノ道^ノ僅^ノ相^ノを^ノ海^ノ聲^ノと^ノ

顛^ニ轉^スも^ノし^ノわ^ノり^ノき^ノな^ノら^ノず^ノと^ノい^ノふ^ノハ^ノ誠^ノに^ノ天^ノ澄^ノよ
 傷^レ志^ノひ^ノり^ノあ^ノら^ノず^ノと^ノい^ノふ^ノは^ノ一^ノ天子^ノ法^ノ度^ノよ^ニお
 ころ^ノは^ノ備^ノ荒^ノ待^ノ出^ノの^ノ候^ノ時^ノあ^ノら^ノと^ノ言^ノふ^ノも^ノ今^ノ不^ノ易^ノの^ノ候^ノよ
 て^ノさ^ノら^ノ又^ノ第^ノ一^ノめ^ノは^ノ軍^ノ實^ノの^ノあ^ノり^ノて^ノて^ノ緊^ノ要^ノの^ノ事^ノよ^ニお^ノし
 む^ノい^ノる^ノ神^ノ武^ノ紀^ノに^ノ備^ノ舟^ノ楫^ノ蓄^ノ兵^ノ糧^ノと^ノい^ノふ^ノハ^ノ兵^ノ食^ノと
 是^ノし^ノは^ノあ^ノら^ノの^ノ制^ノひ^ノも^ノあ^ノら^ノる^ノ也^ノ宣^ノ化^ノ紀^ノに^ノ修^ノ造^ノ
 官^ノ家^ノ郡^ノ津^ノ之^ノ口^ノ聚^ノ移^ノ散^ノ在^ノ之^ノ屯^ノ倉^ノ須^ノ要^ノ以^ノ備^ノ非^ノ常^ノ永^ノ為^ノ民^ノ命^ノ
 天^ノ智^ノ紀^ノ修^ノ高^ノ安^ノ城^ノ積^ノ穀^ノ與^ノ塩^ノ元^ノ正^ノ紀^ノ日^ノ用^ノ兵^ノ之^ノ要^ノ衣^ノ食^ノ為^ノ本^ノ
 鎮^ノ無^ノ儲^ノ糧^ノ何^ノ堪^ノ固^ノ守^ノ募^ノ民^ノ出^ノ穀^ノ運^ノ輸^ノ鎮^ノ可^ノ程^ノ道^ノ遠^ノ近^ノ為^ノ差^ノ委^ノ
 輸^ノ以^ノ遠^ノ二^ノ千^ノ斛^ノ次^ノ三^ノ千^ノ斛^ノ近^ノ四^ノ千^ノ斛^ノ授^ノ外^ノ役^ノ五^ノ位^ノ下^ノ其^ノ六^ノ位

と拵ぎて尚のまを耐つけらるるをさねハいくらと
ありはせよして也山本助助ハ一生のまぬ五十九年京員
深きハ六七十年の氣漸ありたどるるをさねハいくらと
十一年の多負にあはるるのまぬし何ぞの淺病も
とあるは切あはしてハ血脈とまぬし又四物湯ハ物湯と
よりとつとあはしては後めめく或氣おとらへまぬ
の垂るるをさねハ血脈とまぬし又四物湯ハ物湯と
りれハ後の息災ありと
づしといつり此ハ氣の張の強と弱と
ま氣後とつと自効法と云々云々ハ
茶減と一生まぬ者多しややハ
此の氣味茶と減してとる者ハ
動もれハ人參と加味し用ハ
冬湯參附湯と云々と醫の
人參と茶劑の益とや
ハ此病ハ行まいと云々と
あきとてまぬと云々と
門はあてまぬと云々と
まぬハ息災ありと云々と
竟心氣柔弱におとらるる

と十五胃とある金と平地と構つて
と千尋の谷ハ
とさハ忽又是精杖の遊
後陰氣ハ又馬牛狗鹿の属
まよおよげり是ハ
く浮るるづし人の多味
新ぬ中ハ石佛のあと
滞て候ハ男也と云々と
とんハ男女とも云々と
たまハ生男よりまぬ
き辨也とつり附て按
て善悪賢愚の堺と
直日神直日平好合とも
以直養氣とも又堺界心
おりつとつり即今の上
まぬやハ神武のあと
ぬわぎハ神武のあと

なうあどく己と操るるせんハカも亦さむと國賊の徳ある
るべし逆ある楠石論あどくしてふ成劫は大石良雄事
詠とといろいろその世ハ出さるや凡治朝あして
私毒乃事と誣論せん少ハ何れもわつたはぶしそくを
してき切一居つてそまを執あん時ハ一日と孤孀子嬰
て旧存國中と門多ての軍ハ切ると出さるつき夫お今
お我乃士あより少くはといつとも危難子遭て必家
と頑ど戰場へ降て潔く討死せし人おと後、世ハ感字せ
るハ何れぞ西土あてと國母の祠廣ハて下子編く孔明
ハさああまはるよ計死す容易あまもつてあまして忠

義節操日月と並の懸り千載の下生ぐごくそ人と仰
慕るるハ何れや淺見氏遺言誨教よ 後醍醐帝既ハ隱
岐國ハ北狩しおひしうば官軍悪く逃亡して洛と怯
何と期つきともあまに西戎ハりおもせば洛城し
て利害の爲よそ志と屈せられさるるこそ悲あまの甲
富れしうの用武卓剣の時天下ハ統用ハ追従せると仰
夷叔林のこ首陽山ハ倭死や一あ匹夫あれども百世の
下そ人とおりの見よ凜字として必の毛よざらして覺え
るハ天性人の氣立ハ感ある況ど日本詩撰梁田邦美
う詩ハ黃鉞風生、鉄馬飛獨憐、義士媿戎衣、華山佗、日春烟

縁不及首陽崑畔、薇況や楠云父子兄弟相繼て三代忠貞
は篤く節孝一門に萃る所謂戰場も出て忘三あるの比
は何れぞ平世士もるもの、其縁は文事事子縁保ちく
くちどの源流と積貯するも、學問武藝の職業と勤て
生理の明は只道に達せられば忠孝の要、器も徳も亦
し矣、則事あるの時、子孫と伝へん、小何と以、國君の恩徳
と徳のなき、庶幾ぞもの、ふきん者ハ必成たし、あじ
より大なるき、くくくハあはぶ、し凡事の時、ハ清
手用金の係故とせ、上つ、縁も武故、ハかされる番、即
物頭ハあて、男者ハ心、地、事、必、く、散、官、閑、職、と、了、ら、ち、が

つる、あ、く、あ、伊勢氏曰、主將金銀と各番と、ハ、流、士、質
窮して利欲の情起る、溜波の志、も、あ、る、も、武、具、の、修
復ハ、亦、お、ろ、せ、り、あ、り、儉、約、ハ、武、備、の、基、を、ら、各、番、ハ、武、備
の、害、あり、儉、約、と、各、番、との、差、あ、り、子、孫、に、傳、は、る、と、し、り
凡、士、を、し、ん、者、武、具、の、お、ハ、是、財、家、も、あ、る、と、財、の、修
力、あ、る、は、具、是、と、儲、ふ、べ、し、他、日、事、あ、る、は、味、て、修、る、武、具、
と、お、ん、と、し、て、ハ、平、世、の、や、う、の、最、安、か、る、ま、し、珍、當、ま、り、
家、の、後、を、ま、は、大、す、り、時、を、れ、ま、い、つ、れ、て、お、ぐ、れ、と、
この、なり、又、馬、の、口、取、中、間、と、ハ、戦、場、と、し、と、建、被、着、板
の、こ、あ、り、具、是、よ、ハ、及、び、つ、つ、ハ、不、仁、な、り、矢、石、刀、槍、の
中、一、何、と、て、具、是、と、穿、む、は、働、く、も、ま、し、は、具、是、棄、具、是、
て、と、製、造、つ、し、後、女、は、出、く、る、紙、甲、と、あ、り、濡、せ、は、清、丸、と
防、く、は、足、ま、り、但、邊、世、紙、と、い、は、皮、は、覺、て、濡、し、人、は、軟、と
の、何、り、よ、く、費、瀆、し、て、高、價、を、得、あ、べ、く、それ、の、望、別、を、
て、矢、石、よ、く、と、遠、ら、ぬ、程、あ、る、ハ、つ、ま、ま、し、き、なり、新、安
手、簡、と、和、蘭、人、ハ、小、勢、よ、て、美、玉、と、標、は、ら、る、ハ、甲、冑、の、用

考あきハ如何もと向し和藁人の考ハ七十年系
まてハ用りハハ砲院出たりきまの考ハハ
不負由ハハ用ハハ砲院出たりきまの考ハハ
佐木高綱入道曰勇士之赴戰場以兵具為先甲冑者輕薄
弓箭者短小也是為故實とあり代々高綱ハ鳥銃の名
引へち短小也是為故實とあり代々高綱ハ鳥銃の名
てハ去氣の勇況とおのりけり新言ハ義舉の節
乃言ま合つると又はぐし漢と試あどハむさといえ
ましく
けり

屯倉 貞觀儀式五月丑日奏御宅田稻數
員數と上も也職原鈔大炊寮掌諸國
御稻田等東鑑御倉檢納等の事あり
稅倉 同後上後之謂穀倉院の事あり古事履仲卷子始任蔵
記下代とあり應神紀の事あり古語拾遺諸國貢調年々盈溢
周禮の倉人あり大蔵雄畧朝更立大蔵此より前神

正倉 出雲風土記 校

武御宇宮内建齋蔵 履中朝復造内
蔵大藏と併て之と三蔵に稱つり
倉 和名鈔○新猿樂記等又庫と作り北山鈔
校屋あり神代紀の貯とほざる訓あり
御廩 公羊 太倉 晉 倉廩 禮記疏穀蔵曰倉米倉曰廩說
氏之庠也いみハ穀
倉米倉と名と交りハ穀 高廩 毛詩有高廩
萬億及秬

蕃名

垂仁紀廿七年興屯倉于來目邑其後景行紀五十七年令
諸國興田部屯倉屯倉の公儲生名ハハハハハハハハハハ
安閑の御宇と追て制て屯倉と西南諸國ハ定むハハ
と凡廿六所中五所ハ東國ハ在り櫻井田部連等ハ詔
して屯倉の稅と王掌とあり屯倉ハ屯田の稻と上入



二万
 乃
 乃
 乃
 乃



文應元
 年大嘗
 會備中國稻
 春歌
 行家
 乃
 乃
 乃
 乃

とらとて名と故に釋より屯倉者天子之米廩也と
傳やり 安閑 宣化の時ハ儲蓄大に傳より 孝徳
の朝に到て一百八十一所の屯倉と傳られ 文武慶雲
三年に始て義倉と名をたふ本紀曰准令一位以下及
百姓雜色人等皆取戸粟以為義倉義倉之物給養窮民預
為儲備其情合義故曰義倉 養老三年九月六道遭旱開
義倉賑恤之延喜式凡京職正稅義倉穀者省與主計主稅
共知出納正稅主稅
義倉主計 生没 淡路帝常平倉と改めり
あり 孝謙重祚藏徳の媯も此於是 光仁帝の寶
龜十一年にあり官員と并省て園用と賑之の政と復興

せりありと云る曰古者人稠田少而有儲蓄由於節用也
今者地闢戸裁而患不足由糜費也當今之時省官息役上
下同心唯農是務と云は是れ是れは仕官とれハ俸祿と賜
の倉藏と解免とれハ管田也とありがゆゑに官負増
ハ地人少く田園荒とて官と省き農の是と務ん
とてと貴同也とありと云れどと後世にありてハ斟酌
とて一カ又財用と務る者のハ國家の利益と云ふに
其他の冗官閑職ハ徒ら上の粟米を食いつぶして公儲
乃至善ふれをてはるは自ら兼務をとりとて
流るる人の扶持とらあげきとて武士の類をいづく

うたふまはるる魏書に祿賜穀帛人主之所以惠養吏民而
為之司命若令有廢是奪其命といふり中葉亂國とあり
且凶荒おきりいりよ入るる布子租税も過たらん
ざはちとよも多用はらざりて三年の蓄はつ子飽く
もあく當年分の食さへ事欠あつては義倉常平の
儲にお来るる糧あし年竟しては金の入もは取のとも
うまて河の流も波まげ秋津州も穀をふるむる理あれ
ハ我邦金銀衣食の事小わごご給とんおはは唯
中域為ぬ重し荀王制は王者富民霸者富士僅存之國富
大夫とこくとんてこ道或三條なるは何乃津ふらはるる

と問ふよそは同といふものあり凡和といふハ雅樂
の調子あり同ハいとを巧みく霸者の控道あり和
とは地乃おとよそ自然ありといふ自然の事あり
でハ漁仕とハ中よめも也山法壘加曰 文武帝之置義
倉也 淡路帝之敷常平也當時得入焉爾乎益茂聞於後
世々按子隋書に長孫平義倉法ハ令民間每秋皆出粟麥
一石以下貧富為差等儲之間里以備凶年又前漢書に常
平倉ハ宣帝時年豊人利少大司農中丞耿壽昌上計令郡
國皆築倉以穀賤時增其價而糴以利農穀貴時減其價而
糶以利民とあり是漢の時ハ租税甚輕く米糶常子餘候

ありしむとにおのりり此等の儲蓄とゆふは是等禮
 月令の神倉漢藉田倉の善政ありて三代聖人の遺法也
 且と司馬溫公もりり又社倉ハ唐代に始り冊府元
 龜云唐高祖武德元年令州縣始置社倉按朱熹網鑑易知錄
 道四年民艱食朱熹請於府得常平倉米六百石賑貸此方
 の百九十二石辭あり夏受粟於倉冬則加息計米以償自
 後隨年斂散歟其息之半大饑則盡蠲之凡十有四年以
 元數六百石還府見儲米三千一百石以為社倉不復收息
 每石止收耗米三升其法以十家為一甲推一人為首五十
 家則推一人通曉者為社首其逃軍及無行之士與有稅糧
 衣食不缺者並不得入甲其應入甲者又問其願與不願願
 者開具一家大小口若干大口一石小口五斗五歲以下者
 不預置籍以貸之其以
 澤惡不實還者有罰
 又宋范希文義田の法ハ以常稔之
 田千畝養濟羣族之人按宋の百畝より米百五十石と
 收の積りて視てハ千畝ありてハ

千五百 擇族之長而賢者主其計而時其出納焉日食人一
升此方の三合 歲衣人一緇嫁女者五十千再嫁者三十千
 娶婦者三十千再娶者十五千葬者如再嫁之數葬幼者十
 千族之娶者九十口歲入給稻八百斛以其所入給其所聚
 仕而家居俟代者與焉仕而居官者罷其給云々凡希文の
 義田と陳高德の義莊のぐらき士道の高義ありて仁愛
 の美事あり嘗寛文中會津彦土津靈社社倉法を行はり
 る其時の家訓と社倉為民置之為永利者也歲饑則可
 發出濟之不可他用之とゆふとりや按江沼氏曰常平
 社倉ハ民飢と賑給ゆふの法也最善とゆふとゆふ是

西地の遺風史云々人々何れも或ハ依怙備執子タミの如
 出来て久しく以て蓄つて置る也但屯倉法の古くは其設
 漏子似たりといふも却て整雜の弊なしと稱法固此
 儲タカヒのいふ計りもそのわり凡いふしくの蓄積ハ福積とも
 子納定あり今ハ穀をて扱米とせり若穂米コメにてハ今年
 より之斗の米と蓄つて翌年ハ既ハ之升を減少す
 るとのあり是一年の中計りてさハ一石少は既ハ一斗
 の損耗あり況や穀斛の米をれハ穀斛乃費計は魚り
 ば如ハ穂莖を蓄おけハ今年に經くと貯け米と貯時
 小盛りに米小做ハ新穀小定ありと
俗是と今磨とも御
前米とも貯ありハ

穀をて蓄
 一あり ○或曰米廩ハ湿地よりし乾地ハ米穀更ツルりよ
 里土を穿て湖水を打根下と引て積立下俵の腐はると
 の潤あり付米よく保モルあり又曰荒れて米の更ハ故米と
 新米と治込よるあり故米更乃氣残て新米を傳ツクり
 必更るされハ故米を拂出し跡を掃除して風を入火を
 焚て濕氣を去り然新米と治替り風の吹ぬくよしと
 ともりハ濕とも通る唐書云常平倉粟藏九年米藏五年
 下濕之地粟藏五年米藏三年ともるこれハ粟米モミコメ下濕
 の地子貯ありおとハ風土よる一掃又古事記速總
 別王のみつに梯ハシとて乃倉橋山とて書紀ハ神庫

雖高也我能造梯豈煩登乎と云え今熱田神祠ハいみし
 一の御倉作と云ふと神庫乃事とてむりの倉廩生柱
 として高かりりる下學集字又庫と云ふハ其圍の
 本と云午てはよるよし前の校倉の注今吾南島乃倉製
 皆云うるよし方言ハ高倉と云ふり其柱の脚掘て高く
 一底浦と廣くよかし風とて待し且水難名嵐の患と防
 くまふよし今嵐倉と云ふと神武紀ハ高倉下と云ふと
 是とておもひ合とてし主税式ハ穀倉精倉粟倉類倉
 等の名ありワチラ蜜ハ即六蔵とて其址漢と云ふるその土蔵
 ハ土屋とも土屋蔵とも云ふといふなり大如物傳ハ良
 筆宗久の如將

乃と云ふは乃乃五糸とて雨つとて降るれハ荒とる
 門ハかくれて又いふれハ五音と云ふりある榎屋の志
 とも云屋と云ふとあまるとくくもと云ふる建武式目
 子無盡錢の土倉とて同追加ハ應永卅二年洛中洛外酒
 屋土倉負物之事又親元日記文明中三條室町東北頗在
 所事就一亂捨置之処今度焼失畢雖然土倉相殘云々
 西土收穀のあとハあいましとておれし乾隆六年條制
 又查京道各倉收貯米石每廩各置氣筒伍個洩米氣甚為
 有益其氣筒の竹ハ毛竹哉用うと云え昔りおれと沖縄
 人子岡ハ唐ハ官廩ハ納るるに穀と云ふチキリ柱秤とて量取
 至廩ハハそよとて土倉番より度と云ふおし入るるり
 其出入ハ蔵監之哉檢察て秤子斗子おのく嚴重ハ量
 貝銭と云ふと云ふといふ又私ハ穀と蔵と云ふハ去一間

稱責

周禮

稱貸

孟子

貸米

羣芳譜

子本

通鑑

子母

韓文

貫貸

史記

成傳貸買破田千餘項假貧
民役使數千家致產數千金
不盡子利息
母本稻也
期一到點金無術雖重利而不顧惟求先應於會豈非剝肉
醫瘡也
出金多者必欲急利之金借て其者必令其
ちどよ肉とせめて瘡と瘻法もるが如しと云

蕃名

是ハ國制ニ貧窮強弱ト平等ヲ配リ各百姓工ノ位人組
ト立田物志ト以テ出合錢ト村役所ト既貧民ノ者租
多ク食多ク前後ト迫る時ハ其法ト役所より出ル等ハ
一口一村中ト結合立行ゆ急事業ト其者ハ一生運るは

田のきしと取はとく年々賭入六とのとあわり是貸

税の古法遺する大形より士以上ハかやうに伍人組の

約束よ及む困窮の朋党ハ申子有るハ富饒の者よりハ

い合救助と申す申すれよりト義理ハ大く以上を

りよりハ逃るる者ハ壁のくも向かきぬと

ふハあさきまきわさあめりむり祭記の文と以て

天下の蒼老ト始としてハ窮民と申すやうに養育の支

配とよりむいハ懸溝のゆかり日本後紀桓武帝

勅曰貧民彌貧富家愈富拘濟之道不須然割折有餘之貯

假貸不足之徒收納之時先得報之若遭凶年有未納者賜

以正稅後徵負人又是より前養老四年太政官奏望請比
年之間令諸國每年春初出稅貸與百姓繼其產業至秋熟
後依數徵納其稻既不息利令當年納足不得延引穀有逋
懸又曰百姓之間負稻者多緣無可還頻經歲月若致切徵
因即近散望請限養老二年以前無論公私皆從放免庶使
貧乏百姓各存家業是乎付凶年餘歲ハ富饒餘缺何
との米穀と常價比とく糶み出さしめ亦ハ春ハ正稅
の稻と百姓ハ修あつと秋もむて返納せしめてそ利息
とは收むとあつ時の急難を賑ひ民の係累成免りて
しるの善政も出てその義倉の能とあつし唐柳仲郢凡

理藩府急於濟貧卹孤有水旱必先期假貸廩軍食必精豐
逋租必貫免館傳必増飾宴賓犒軍必華盛凡自露出ハ
信約あしそ人と侍あつとけ華盛あつと小事とつと
盡夫の能とる取よりとされハ凡先上下ハ限る人
は借用せざるふととせよの懸ぐし尚儉撮要曰錢と借
里用の時ハ產と破るの善より後べきけハ銀紙辛若
して惡衣惡食と恥出の他借さるるに若くは若くは
て財と借りたはけおたふよかあてよと返りて始借り
一時の恩とおの福もあらにまし借さるしかんも
若くは辛の中より出し使さるると亦ハかり用ては

らぎ休まておし怒るべし人の辛苦して終へ一姓をか
り用て返さば一旦貧乏不我の利便と成りも是盜賊の
比と免れんは後身の地味亦のがる無うべし○一村は
申り高貴の士物力の百姓ありとて其郡大夫の農圃
等よりちりどいつとて何と是を農圃とてハ必ま息
なく災は備つる富むとてなきとてのれ一寺に儉歳も何
のぬまを田島まてとて富戸へ物物して米淺と成りそ
米淺とてとてその租と償と理年よりそ償よりそと
とてその利息とてとてたぬまは其終とて流やと
のを流分ちうかつとて一村の窮民を流しそ富戸の者

乃奴隷のやうになさりさればじり延喜二年傳止買
取百姓田地舍宅占請閑地荒田格曰賂遺之所費田地遂
為豪家之莊軒構之所損民烟長失農業之地中八埏之地
有限百王之運無窮若削有限之壤常奉無窮之運則後代
百姓可得而耕乎とて或曰富民田質は典貧民は金
とてかしくけ高利と取て流しハかきか田地とるは
よゆハ流して貧ハ流して富もあやとてハ田地の
持多一町は不足民ハ貧流しあやとて流して流し
あやとて流しそ中ハ賣買ハ何やとてハ人の生理三十
とて流しハ十とて七貧富地味豊るとてあやとて流し

権の大買となく難存の極多となく平字ありて状証を
すくありていふも百姓とらつとも賣と禁とる村
ハ不賣して立留也小祿の仕賣源とるかある縁を多
うらと相續するにんごし百姓ハ賣中ハ次第とある
ゆゑあるごとくして賣とく終る迄頭も立よむとある
里按ハ賣田地ハ書入の年より二十年とされハ流地と
あると式目よんえ有合ハ書入乃年より十年とさ
しは流地とある也尤お代ハ賣買とくあるといふく
の禁制あり元明紀曰賣買田以錢為價若以他物為價田
并其物共為沒官或有糾告者則給告人賣及買人並科違

勅罪本政書云一夫占田五十畝其有羨田之家毋得市田
其無田與游惰未作皆驅之使為隸農以耕田之羨者
而雜紐錢穀以或曰百姓ハ代々一社出生とるは喜ハ
百姓乃力ある地ハ次第くよ喜とるものあり又子孫多
くして少し志んたいふごとく百姓ハ地郡境のありて
ハ日りより日りの高利乃借金つこし是より二月二
乃頃より助成つこし九月十月乃頃ハ右乃他物ハ利息
城加へ御とあるは流少といふと借金乃利
是よりいれて御とあるは流少といふと借金乃利
て御と御討に村ハ不入る所の助成守備と二日
ありハ一日り御許乃利息つて村切ハ借つてくは賣

